

# 下谷地(1)遺跡

昭和62年度

青森県教育委員会



し も や ち

# 下谷地(1)遺跡

—東部上北広域農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和62年度

青森県教育委員会



## 序

青森県教育委員会は昭和60年度、同61年度の2箇年にわたって、東部上北広域農道整備事業予定地内に所在する下田町下谷地(1)遺跡の記録保存を図るため、発掘調査を実施した。

遺跡からは、平安時代の堅穴住居跡4軒と、それに伴う土師器、須恵器、鉄製品等の当時の人々が日常生活を営むのに必要な道具が発見されました。

本報告書は、この発掘調査の成果をまとめたものであり、いささかでも文化財の保護及び活用に資するところがあれば幸いに存じます。

最後でありますが、調査の実施と報告書の作成にあたり関係各位からの御協力、御指導を賜りましたことに対し、心から感謝の意を表します。

昭和63年3月

青森県教育委員会

教育長 本間茂夫



## 例　　言

- 1 本報告書は、昭和60年度、昭和61年度に実施した東部上北広域農道整備事業に係る下谷地  
(1)遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 執筆者の氏名は、依頼原稿は文頭に、そのほかは文末に記してある。
- 3 挿図の縮尺は、遺構 (±、±)、土器 (±、±)、石器 (±) 等、種類、器種毎に統一をはかり、それぞれスケールを付した。また挿図中で使用したスクリーン・トーンの表示は次のとおりである。



- 4 土層観察に用いた色調・粒径区分等は「新版標準土色帖」(小山、竹原: 1979) を参考にして表記した。
- 5 資料の鑑定並びに分析については、下記の方に依頼した。  
石器石質鑑定 青森県立八戸高等学校教諭 松山 力
- 6 発掘調査及び報告書の作成にあたって、次の諸氏から御教示、御指導を得た。(敬称省略、順不同)  
成田健康、桜田 隆、工藤竹久、小川貴司、国生 尚、工藤清泰、船木義勝、藤沼邦彦、高橋与右エ門、雪田 孝、永井八郎、栗村知広、滝沢幸長、高島成佑
- 7 引用・参考文献については巻末に収めた。文中に引用した文献名については著者名と刊行西暦年で示した。(例、青森県教委: 1988)

## 目 次

序	
例言	
第Ⅰ章 調査に至る経過と調査要項	2
第1節 調査に至る経過	2
第2節 調査要項	2
第Ⅱ章 調査の経過と周辺の関連遺跡	5
第1節 調査の経過	5
(1) 第1次調査	5
(2) 第2次調査	5
第2節 下谷地(1)遺跡周辺の古代の遺跡	8
第Ⅲ章 遺跡の地形と層序	11
第1節 遺跡の位置と地形及び地質	11
第2節 遺跡の層序	11
第Ⅳ章 検出遺構と出土遺物	15
第1節 堅穴住居跡と出土遺物	15
第2節 土壌	32
第3節 焼土遺構	34
第4節 溝状ピット	35
第Ⅴ章 遺構外出土遺物	36
第VI章まとめ	38
〔付篇〕 遺跡の分布調査	39

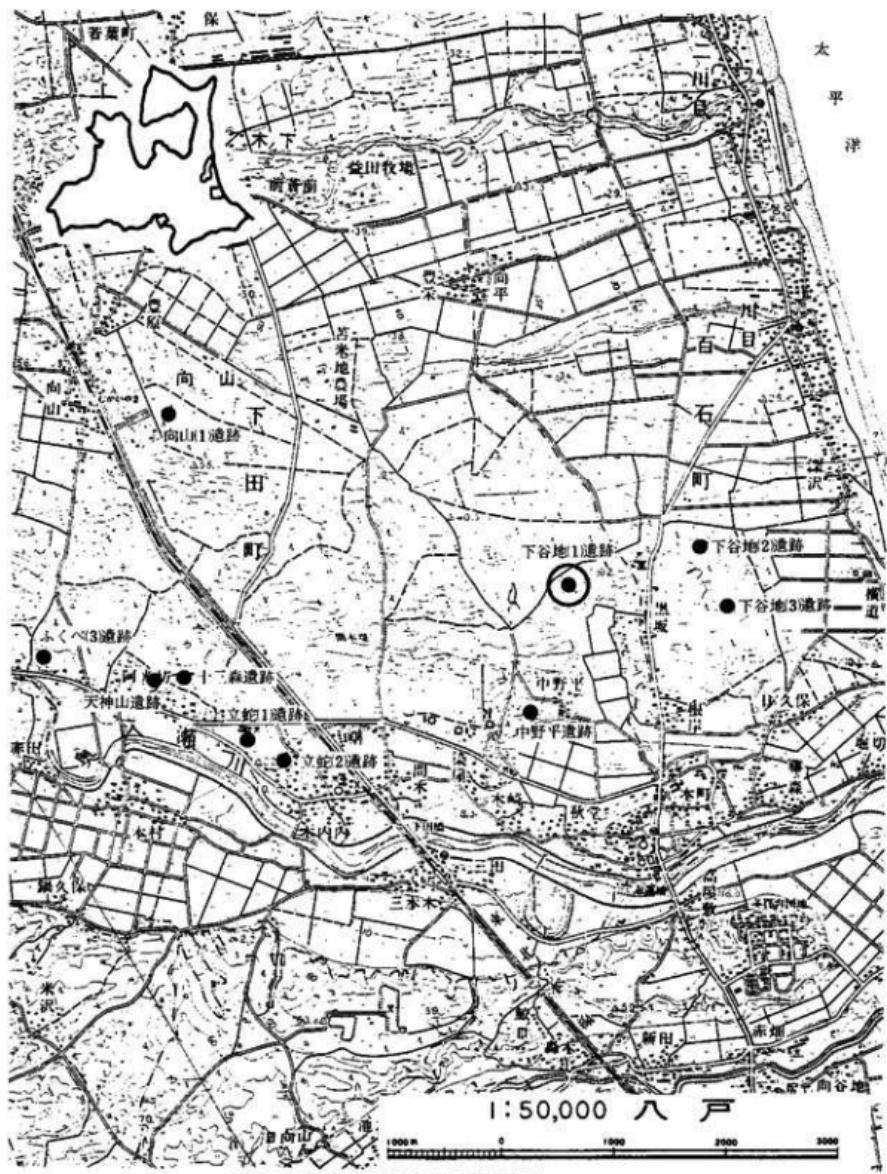


図1 下谷地1遺跡と周辺の関連遺跡  
(国土地理院発行5万分の1「八戸」を複製)

# 第Ⅰ章 調査に至る経過と調査要項

## 第1節 調査に至る経過

昭和59年6月、青森県農林部が新規着工することになった東部上北広域農道整備事業の計画路線が下田町に所在する下谷地(1)遺跡にかかることが確認された。

その措置について、県農林部と青森県教育委員会が協議した結果、現状保存は困難であるとし、記録保存のための発掘調査を実施することに合意した。

遺跡は周辺の分布調査の結果から、平安時代と縄文時代の各集落跡が複合しているものと予想されており、農道建設予定地は当該遺跡の北側に位置するため、調査予定面積を3,000m<sup>2</sup>とした。また、調査は2箇年にわたって実施することにした。

昭和59年9月22日にはとりあえず昭和60年度分として、当該遺跡の1部1,000m<sup>2</sup>の発掘調査依頼があった。この第1次調査は、昭和60年4月15日から同年5月15日まで行われることになり、残り2,000m<sup>2</sup>については、第2次調査として昭和61年度に実施することになった。

また、昭和60年9月26日には第2次分の調査以来があり、昭和61年7月1日から同年8月23日まで実施されることになった。

(三浦圭介)

## 第2節 調査要項

### 1 第1次発掘調査要項

#### (1) 調査目的

東部上北広域農道整備事業実施に先立ち、事業予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の文化財活用に資するものである。

#### (2) 調査期間

昭和60年4月15日から昭和60年5月15日まで

#### (3) 遺跡名及び所在地

下谷地(1)遺跡 上北郡下田町字向山2059他

#### (4) 調査面積

1,000m<sup>2</sup>

(5) 調査委託者

青森県農林部

(6) 調査受託者

青森県教育委員会

(7) 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

(8) 調査協力機関

下田町教育委員会

上北教育事務所

(9) 調査参加者

ア 調査指導員

村越 潔 弘前大学教授

イ 調査協力員

澤頭勇七 下田町教育委員会教育長

ウ 調査員

松山 力 県立八戸高等学校教諭

エ 青森県埋蔵文化財調査センター

調査第一課長 新谷 武 (現県立木造高等学校稲垣分校教頭)

主査 三浦圭介 (現総括主査)

主事 赤平智尚 (現主査)

調査補助員 小田川哲彦、蝦名謙一、竹内 史、葛西直子

2 第2次発掘調査要項 (第1次調査と同様の項は省略した)

(1) 調査期間

昭和61年7月1日から同年8月23日まで

(2) 調査面積

2,000m<sup>2</sup>

(3) 調査参加者

ア 調査指導員

村越 潔 弘前大学教授

イ 調査協力員

澤頭勇七 下田町教育委員会教育長

ウ 調査員

松山 力 県立八戸高等学校教諭

エ 青森県埋蔵文化財調査センター

調査第一課長 市川金丸（昭和62年4月 調査第三課長から）

総括主幹調査第一課長事務取扱 新谷 武（現県立木造高等学校福垣分校教頭）

総括主査 三浦圭介

主 事 赤平智尚（現主査）

調査補助員 金枝律明、木村隆文、葛西直子

## 第Ⅱ章 調査の経過と周辺の関連遺跡

### 第1節 調査の経過

#### (1) 第1次調査

4月15日に、調査作業員と調査日程、調査方法等の打ち合わせを行った。その後、調査予定地内の環境整備を行った。翌16日からは前日に引きつき環境整備を行うとともにグリッド設定作業に入った。工事用中心杭74、75の2点を基軸線とし、これを基準に小グリッドを設定した。この基軸線は、南北方向である。

4月17日からは本格的な粗掘り作業を行い、この後約1ヶ月間は粗掘りと遺構確認作業を行った。遺跡内は樹令30年前後の杉林であったため、小グリッド（3m×3m）中、平均4本程の切株が存在し、その抜根に多大な労力を費やすこととなった。同時に、粗掘りの合間を見て、調査予定地周辺の分布調査を行った。同一台地上東方約50m程離れた畠地からは縄文時代早期の貝殻文土器や剥片石器、平安時代の土師器片が採集された。これらの時期の遺構が調査予定地内でも検出される可能性が高まった。また、調査予定地の西側には、まだ埋まり切らずにくぼ地として確認される古代の堅穴住居が56基確認された。このくぼ地群のうちの最北端に位置するものは調査予定地と約10m程の距離にあることから古代の集落の一部は調査予定地内にも延びていることが予想された。

抜根及び粗掘り作業は5月上旬まで続けたが、途中、風倒木痕と推定される落ち込みが2箇所で確認されただけで、遺構は全く検出されず、しかも土器、石器等の遺物も出土しなかった。このため、5月30日までの調査予定期間であったが、2週間程期間を短縮し、5月15日をもって第1次調査を打ち切ることとした。

5月15日には、層序観察用として深掘りした危険箇所の埋め戻しを行った後、器材を撤収し第1次調査を終了した。

#### (2) 第2次調査

第2次調査予定地は、昭和60年度の第1次調査地点の南側に隣接した緩斜面であるが、この地点の約400m南方の台地南端（路線上でもある）には埋まり切らない堅穴住居が調査直前になって4基確認された。したがって、今回の調査には、この地点も調査対象範囲に含ませること

ととなった。調査は台地南端の集落跡（B地区）を中心に進めることとした。

7月1日には、土地改良事務所、下田町役場担当職員と、現地で調査の打ち合わせを行い、これと並行して、調査器材の現地への搬入や、遺跡の環境整備を行った。

7月2日からはグリッド設定作業に入った。A地点とは距離が離れているため、第一次調査とは別個にグリッドを設定することにした。工事用中心杭No.53、同54を基軸線として4mの小グリッドを設定した。

この作業と並行して粗掘り作業に入った。粗掘りは各竪穴住居跡が地表面で確認できるため、各々の住居跡周辺から開始した。予定地内には樹令30～50年の杉林が植林されているため、竪穴を破壊しないよう慎重に掘り進めた。

7月中旬には、各々の竪穴の地表面での地形測量（等高線は10cm間隔）も終り、精査に入った。

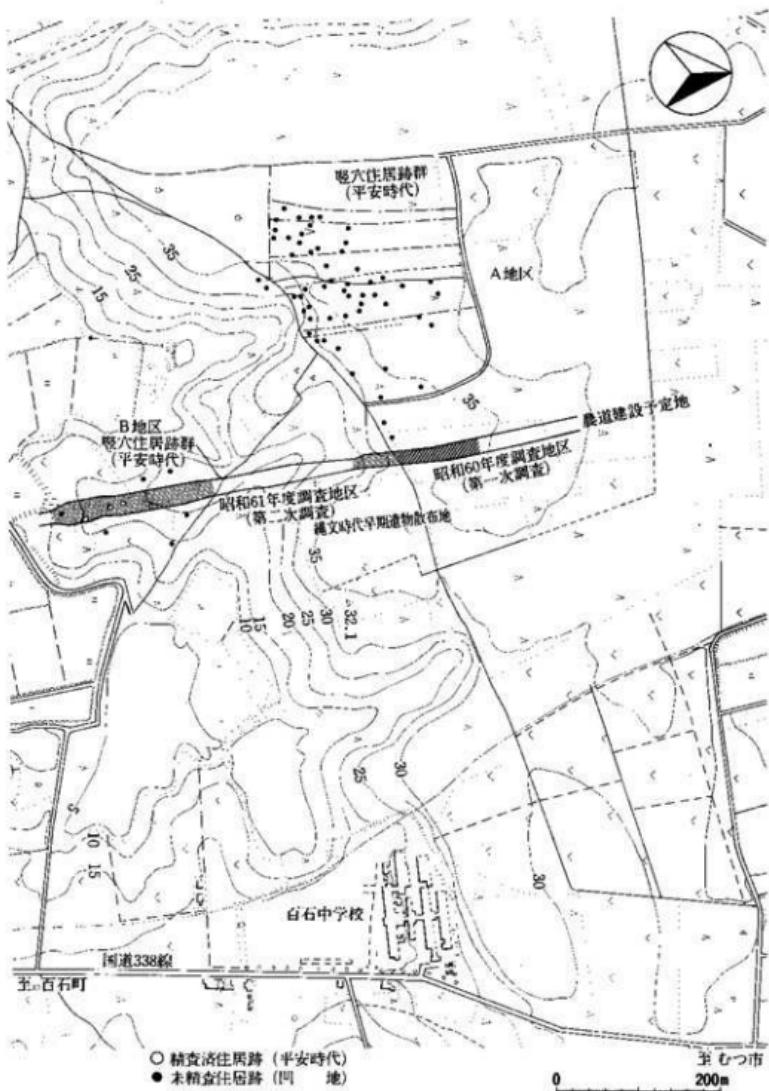
また、7月下旬には第3号竪穴住居跡の南側に隣接し、3基の長方形土壙が確認され、その精査に入った。B地点の遺構精査が軌道に乗った8月4日には、A地点の粗掘り作業を開始した。この地点は斜面部分であり、当時の生活面（遺物包含層）までは1m～130cmと深く、炎天下の粗掘りは極めて労力を費やす作業となった。

この後8月22日まで精査作業が実施され、平安時代の竪穴住居跡4軒、土壙（貯蔵庫？）3基が検出され、当時の集落構造の一端を知り得た。

この間、下田町教育委員会、同文化財審査委員、及び町民が現場を訪れ、遺跡を見学した。

8月23日には調査器材の搬出と、遺跡内の整備を行って、全作業を終了した。

（三浦圭介）



## 第2節 下谷地(1)遺跡周辺の古代の遺跡

十和田湖に源を発した奥入瀬川（流域により相坂川・百石川・藤島川・奥入瀬川と呼称されてきた）は、下田町・百石町の両行政管内で下流域を形成する。下田町及び百石町は高位段丘の上北台地や中位段丘の三沢台地を中心に、奥入瀬川によって形成された狭い沖積平野から成る。本遺跡はこの上北台地に立地しているが、奥入瀬川に深く係わりながら営まれたものであることは想像に難くない。本遺跡が営まれた年代は平安時代中頃と推定されるが、この河川の下流域の両行政管内に所在する本遺跡と概ね同時期の古代の遺跡の立地や、その性格等を概観し、本遺跡を理解する上での一助としたい。

【奈良時代】 現在確認されている集落跡は下谷地(2)遺跡、立蛇(1)遺跡である。

下谷地(2)遺跡は本遺跡の東方約0.5km程離れた三沢台地に連なる標高20m程の舌状台地の先端部に立地する。昭和57年に百石町教育委員会が実施した発掘調査では3軒の竪穴住居跡を精査し、他に11箇所の竪穴住居跡と思われる落ち込みを確認している（百石町教委：1982）。

精査の実施された3軒の住居跡は同時に存在したものではなく第2号住居跡は8世紀前半、第1号住居跡は8世紀後半で、やや時間的幅があるようと思われる。第2号住居跡はかまどを持たないことから日常生活を営むための「住居」ではなく倉庫等の性格をもった建物と思われるが、他の2軒は一辺4m前後の隅丸方形の竪穴住居跡で、しかも北壁にかまどが設置されており、奈良時代の一般集落にみられるものと大差ない構造である。

立蛇(1)遺跡は、奥入瀬川左岸の河川に面した河岸段丘上に立地する。現在畠地であり、これまで調査は行われていないが土地所有者による遺物の採集が行われ、これまで10数点の土師器が復原されている。壺が4点、球胴の甕が3点、瓶が4点、他に土製紡錘車、土製支脚がある。土師器はいずれもロクロ末使用で、壺は体部に、甕は頭部に段をもつ。壺は内外面全体をヘラミガキによる入念な調整を行っている。器形及び調整の特徴は8世紀前半から中頃にかけてを示すものであろう。また、球胴の甕の1点は口縁部に数段に渡る段状の沈線が施されている。調整はハケメによる。これは8世紀中頃から後半代に位置づけられる。この他、本遺跡で特徴的なのは3点の円筒型瓶であろう。外面のミガキの手法は他の土師器と共に通するが特殊な器形はこれまで知られていないものである。他に一般的な瓶が存在することから特殊な性格をもつたものであろう。

この他、遺跡の性格が明らかではないが出土遺物（8世紀の土師器壺、直刀）から奈良時代に比定できる遺跡として、十三森遺跡がある。この遺跡は上北台地に連なる標高30m程の台地上に立地している。下田町阿光防地区の北東の山林中に大小70基程の墳丘が存在し、形状は終末期古墳のそれに類するが、中世の十三塚説や、佐々木盛綱伝説を考慮すると、8世紀代に比

定できる遺物と、70余りの墳丘は共伴するかどうか明らかでない。

【平安時代】 この時代に属する遺跡のほとんどは集落跡である。これには下谷地(1)遺跡(本遺跡) A地区、同B地区、中野平遺跡、ふくべ(1)遺跡、同(2)遺跡、同(3)遺跡がある。

下谷地(1)遺跡はA、B二つの地区に集落がある。いずれも地表面から確認できる程のくぼ地となっており、堅穴住居跡廃棄後約1000年後の今日でも完全にまだ埋まり切らない住居である。A地区には56ヶ所のくぼ地が存在する。このうちの数箇所は倉庫跡等の機能をもったものの可能性もあるが、大部分は堅穴住居跡である。また、所属時期の問題に関しては周辺から採集した土器器片はロクロ使用であることから、平安時代に位置づけられるであろう。ただし、くぼ地の分布からは全てが同時存在ではなく、3～5時期に渡った可能性が高い。

B地区では第二次調査で検出された4軒の堅穴住居跡を含む10軒の堅穴住居跡が確認された。この4軒の住居跡も地表面で確認できたものである。これらの住居跡は平安時代中頃、概ね、

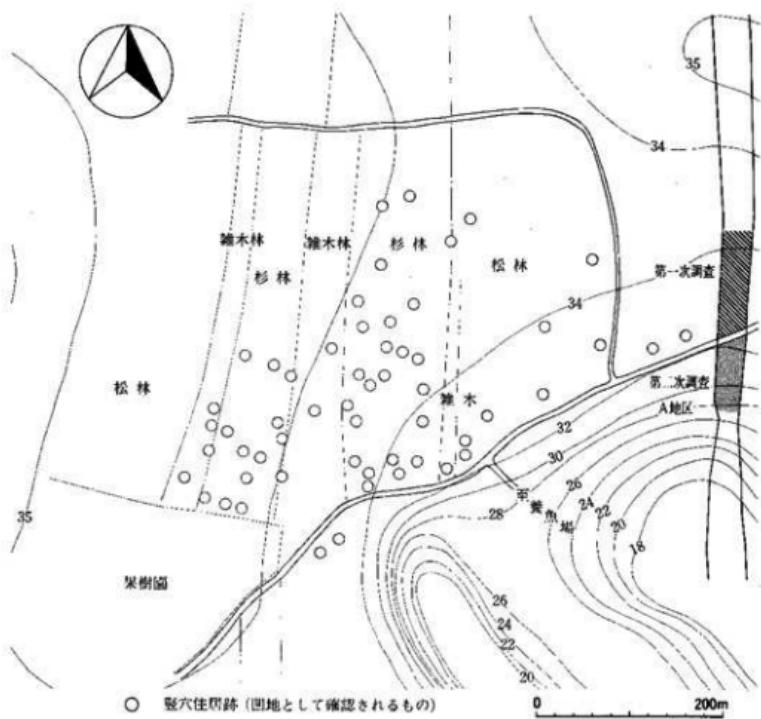


図3 下谷地(1)遺跡 A地点堅穴住居跡分布図(平安時代)

10世紀を中心とするものである。他の6軒も竪穴間の距離や台地上での占地のあり方から、これらと同時存在の可能性が高い。したがって、この10軒の竪穴群は舌状に張り出した小台地上に構築された集落と言えよう。ただし集落としての寿命は短期間だったと言える。

中野平遺跡、ふくべ<sup>(1)</sup>、同<sup>(2)</sup>、同<sup>(3)</sup>の各遺跡も下谷地<sup>(1)</sup>遺跡同様にくぼ地として確認された竪穴住居跡が遺跡発見の契機である。各遺跡周辺からは平安時代の土師器・須恵器が発見されている。竪穴の個数及びその分布状況についての詳細は調べられていない。

(三浦圭介)

### 第Ⅲ章 遺跡の地形と層序

県立八戸高等学校教諭 松 山 力

#### 第1節 遺跡の位置と地形及び地質

下谷地遺跡は百石町中心街からほぼ北々西方へおよそ2km、東方の太平洋岸からほぼ3km離れた地点の柴山段丘南端部からその北に接する高館段丘南縁部にかけて広がっていて、発掘は柴山段丘南端から北方へ細長くのびる道路予定地のうち、柴山段丘上の南半部と、その北に小谷を隔てて高まっている高館段丘の段丘崖から段丘面にかけての部分とで行われた。

百石町の中心街の南側には十和田湖に源を発する奥入瀬川が西から東に流れる。奥入瀬川の流れに沿って六戸町より下流では幅1.5~2kmの沖積地が西から東に続き、その両側には天狗岱段丘・高館段丘・柴山段丘・折茂段丘・大和段丘などの洪積段丘群が台地をつくっている。このうち、遺跡周辺にはおもに高館段丘・柴山段丘・折茂段丘が分布する。

遺跡の北半をのせる高館段丘は、遺跡の西方の間木堤の西1kmほどのところから小川原湖東岸を結ぶ線と、太平洋岸とに挟まれた広大な範囲に広がる高度20~40mの段丘で、平坦面がよく残されている。その南縁は間木堤の北岸から東にのび、遺跡の西600m付近の南にのびる小谷の出口から東北東に向きを変えて遺跡のなかを通り抜け、黒坂の北東方で南東方に折れて太平洋岸近くにのびている。遺跡付近での段丘面高度は35m程度で北方と東方に低くなる。

柴山段丘は、八戸付近の根城段丘に相当する。東北本線に近い間木の北からその東方の中野平にかけて東西にのびる段丘がその典型で、高度20~25m、幅500~800mの平坦面をもっている。遺跡東方の黒坂の北方で高館段丘と接し、その南の根岸までのびる幅800mほどの台地も柴山段丘にあたる。西から中野平にのびる柴山段丘の北縁と北方の高館段丘の南縁の間には間木堤を抱えて西から東にのびる幅150~300m程度の細長い沖積地があり、遺跡の南端付近で南に鍵型に折れ曲がり、中野平側の柴山段丘と黒坂側の柴山段丘の間を抜けて奥入瀬川に沿う冲積地に合っている。両側の柴山段丘の間の沖積地の幅は300~400mである。

前述のように遺跡の西600m付近には北から南へ全長800m程度の小谷があり、また遺跡の東側と西側にはもっと小規模の小谷があつて、その間に高館段丘に付随するよう2つの柴山段丘相当の小段丘があり、遺跡の南半部は東側の小段丘にのっている。遺跡の中には、遺跡を2分するように、東側の小谷から分岐した小沢が北西にくさび型に食い込む。

#### 第2節 遺跡の層序

天狗岱段丘には天狗岱火山灰層とそれ以降の火山灰層が、高館段丘には高館火山灰層以降の火山灰層が、柴山段丘には高館火山灰層中部以降の火山灰層が、折茂段丘には高館火山灰層上部以降の火山灰層がのっている。

遺跡における八戸火山灰層の上位にのる土層の厚さはふつう平坦面では60cm程度（図4—2は段丘崖の縁のもので15~30cm）で、これをⅠ～Ⅲ A上部（前年度調査のⅢ層相当—写真2）の3層に区分し、八戸火山灰層をⅢ A下部～Ⅲ F層（前年度調査のⅣ a～Ⅳ dとV a～V d層相当）の6層にわけ、高館火山灰層をⅣ層（前年度調査のV e～V f層相当）とする。

Ⅰ層（表土）はやや粘性に富む黒褐色～暗褐色のシルト状土層で、厚さはふつう15~25cm程度である。

Ⅱ層は比較的粘性に乏しい黒褐色の砂質シルト状土層で、乾燥すると白っぽく水で濡らせば真黒色になる。厚さはふつう10~20cmで、粒径数mm～20mmの灰白色あるいは黄褐色～淡褐色の浮石が散在する。

Ⅲ A上部層は厚さがふつう15~35cmの、平均的には暗褐色のシルト状土層であるが、色調は上ほど暗く下ほどローム質となって明るく、部分的にはやや暗い黄褐色土層に変化する。ここにもⅡ層中に含まれると同様の浮石が散在している。

Ⅲ A下部～Ⅲ F層は八戸火山灰層である。

八戸火山灰層のうち、Ⅲ A下部層は八戸火山灰上部の褐色粘土質火山灰層（ローム）にあたるもので、遺跡では明黄褐色の粘土質シルト状火山灰層となっており、粒径数mm～2cm程度の浮石が散在して、厚さは30~40cm程度である。

Ⅲ B層は大池昭二や松山 力など（以下OMと略称する）の八戸火山灰層V層にあたる砂質粘土質シルト状火山灰層で、粘性に富み、浅黄橙色を呈する。

Ⅲ C層はOMのIV層にあたる浅黄橙色～灰白色の浮石層である。10mm前後の浅黄橙色～灰白色浮石と5mm前後の明黄褐色～灰白色浮石および黒褐色の岩片の混合層で、浮石粒は堅いが粒子間の膠結（結合）が弱いためにやすく崩れやすい。この部分の厚さは25~30cmである。

Ⅲ D層はOMのⅢ層にあたる浅黄橙色～灰白色のうすい砂質シルト状火山灰層で、粒径数mm程度の堅い灰白色浮石を多量に含む。その厚さは数cm以内である。

Ⅲ E層はOMのⅡ層にあたるうすい灰白色の浮石層である。浮石層はⅢ C層とほぼ同様の浮石と黒褐色の岩片の混合したもので厚さはⅢ D層と同様に数cm以内である。

Ⅲ F層は厚さ45~70cmとかなり厚く、OMのⅠ層に相当する。全体としては灰白色でかなり粘性に富む粘土質の砂質シルト状火山灰層であるが、中ほどにそれぞれ数cm程度の浮石層が、間に5~10cmの砂質火山灰層を挟んで2層並んでいて、上のものをⅢ F—1層、下のものをⅢ F—2層とした。両層とも粒径20~30mmおよび数～10mmの堅い浮石の混合層で間を砂質シルト状火山灰が埋めている。Ⅲ F—2層の下の下半部にも粒径数mm程度の浮石列が並ぶほか、Ⅲ F層全体としても同様の粒径の浮石が多量に混じっている。

Ⅳ層はすでに述べたように高館火山灰層で、発掘はその上部の130cmの深さまで行われたほか、遺跡の南端の柴山段丘の段丘崖で高館火山灰層中位以上が確認されている。



図4-1 遺跡周辺の地形区分図

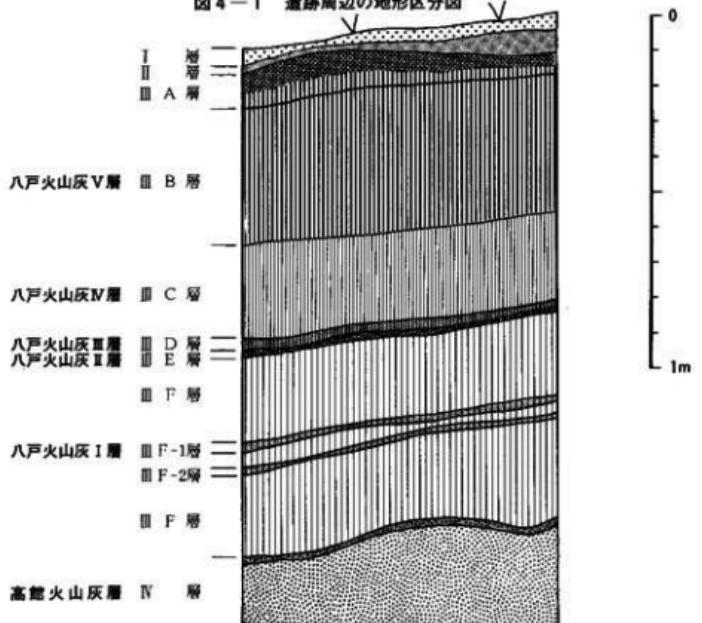


図4-2 標準土層(B地区E-65クリッド壁)

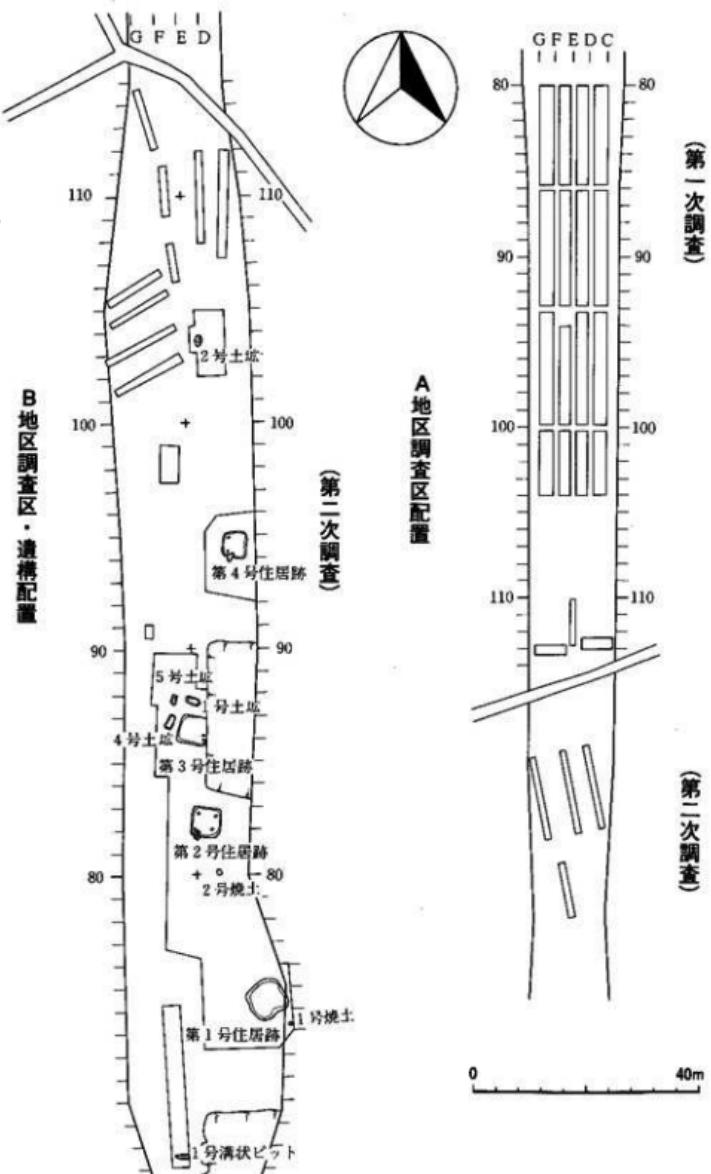


図5 下谷地(1)遺跡遺構配置

## 第IV章 検出遺構と出土遺物

### 第1節 壺穴住居跡と出土遺物

本遺跡では、A・B両地区合わせて60軒以上の壺穴住居跡と思われるくぼ地が、地表面から確認されている。そのうち、今回の2年次に調査したB地区では予定路線内から4軒、周辺から6軒が確認された。

#### 第1号壺穴住居跡 図6～8 写真6～7

【位置と確認】 調査区の最南端B地区A～B-74～75に位置する。直径5m、深さ約0.6mの円形のくぼみとして地表面で確認した。図6に確認状況を示す。

【平面形・規模】 魔棄された状態のため遺存状態は悪く、4隅の壁の一部以外、崩落か人为的な破壊によって壊れており、原形を留どめない。残存部から1辺5.5mの隅丸方形の住居跡であり、床面積は31.6m<sup>2</sup>であると推定される。主軸方向は、S-29°～Eである。

【壁】 いずれも黄褐色粘土を掘り込んでおり、確認面からの壁高は北壁側で53～55cm、南壁側で67～75cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。東壁および北壁の床面には、崩落した壁が長さ1.5m～2mの塊となって堆積している。

【床】 中央部3m四方には厚さ12cm前後のローム交じりの暗褐色シルト質土を貼った痕跡があるが、比較的柔らかい。壁周辺部、特に北西および南東コーナー付近では、床の掘り方に、一定の大きさ、深さの鋸の痕跡と思われる小ピットが多数検出された（写真7）。北西コーナーでは、直径10～12cm、最大14cm、深さ8～10cm、南東コーナーでは、直径20～22cm、深さ10cm前後であり、本壺穴掘削時に使用した工具の痕跡と思われる。

【柱穴】 壺穴住居跡内には、柱穴は存在しない。

【かまど】 構築された痕跡はない。

【覆土・堆積状況】 壁を破壊した後は、自然堆積状態を示し、7層に区分できた。黒褐色系のシルト質土が主体で、貼り床を除く初期堆積土中には、地山の明黄褐色ロームが多く含まれる。

【付属施設】 なし

【出土遺物】 土師器甕の破片が5片、羽口片が1片および石鐵が1点出土した（写真一18）。土師器は細片のため細部までの特徴はつかめないが、胴部外面には縦位のヘラナデ調整がみられる。図7は、3B層から出土した圓基無茎甕である。基部の抉りは深く、有脚状であり長幅比は1.2、尖頂部の開き角度は40°である。形状は、二等辺三角形である。石質は、

玉髓質珪質頁岩である。

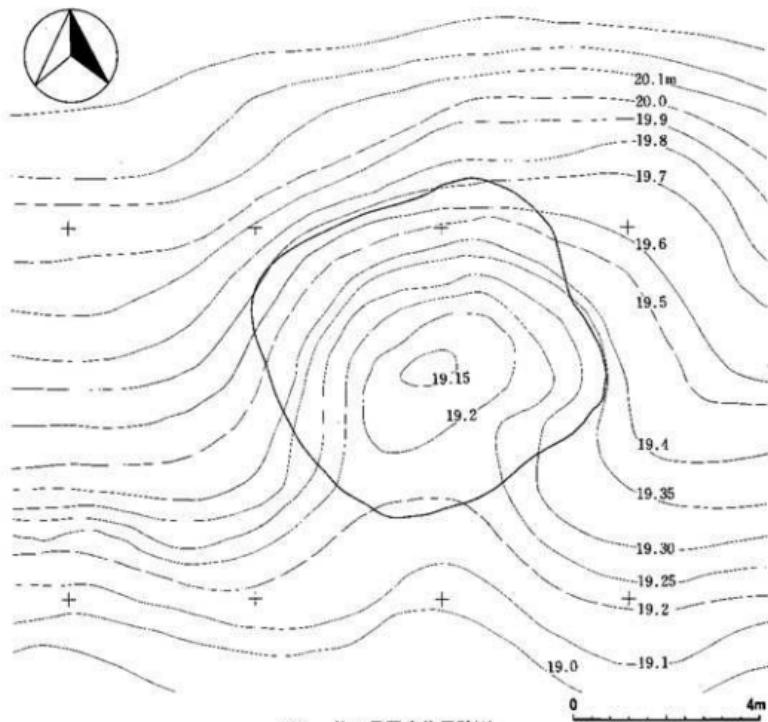


図6 第1号竪穴住居跡(1)

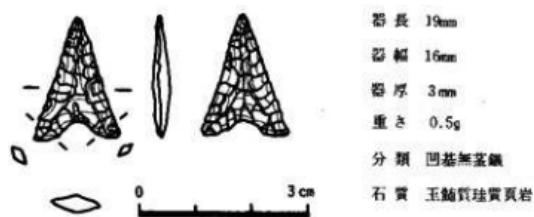
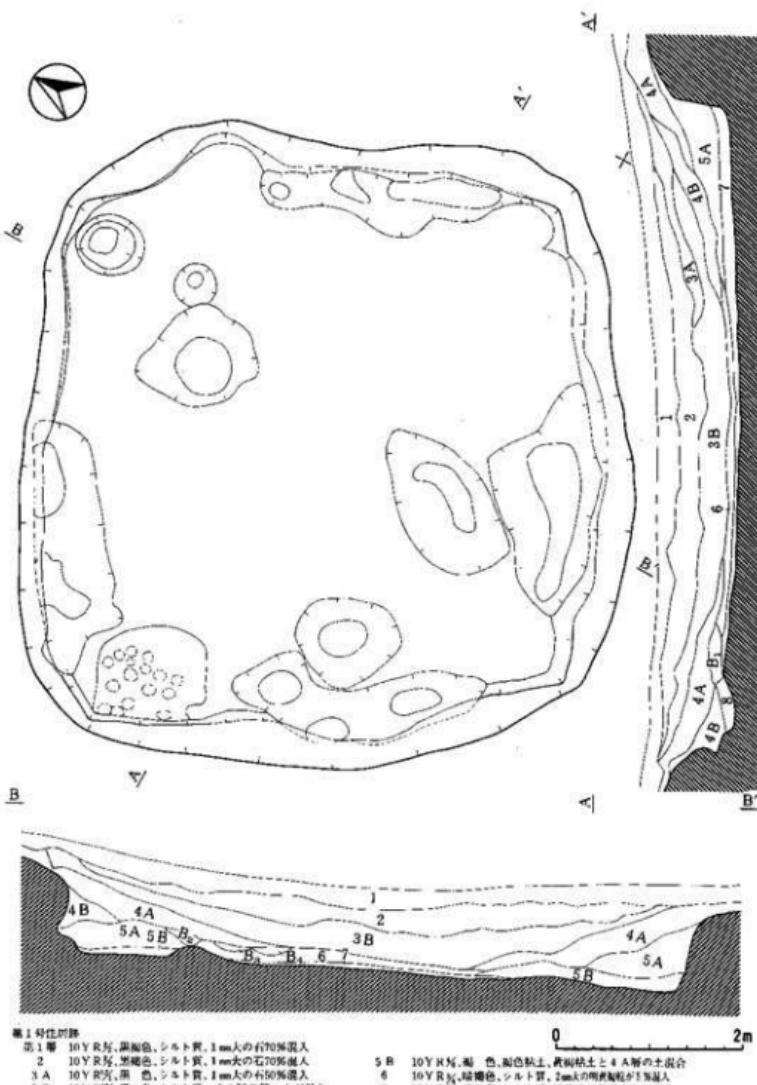


図7 第1号竪穴住居跡出土石器



第1号性状  
 第1番 10Y R 8分, 黒褐色, シルト質, 1mmの大の石70%混入  
 2 10Y R 8分, 黒褐色, シルト質, 1mm大の石50%混入  
 3 A 10Y R 8分, 黒 色, シルト質, 1mm大の石50%混入  
 3 B 10Y R 8分, 黒 色, シルト質, 3 A層の粗い土が混入  
 4 A 10Y R 8分, 黒褐色, シルト質, 明著な砂礫が20%以上混入  
 4 B 10Y R 8分, 黒褐色, シルト質, 明著な砂礫が20%以上混入  
 5 A 10Y R 8分, 黒褐色, シルト質と帶い表面粘土  
 が混入

5 B 10Y R 8分, 黒 色, 黒色粘土と4 A層の土混合  
 6 10Y R 8分, 緑褐色, シルト質, 2mmの角質細胞が5%混入  
 7 10Y R 8分, 黄褐色, シルト質, 明著な砂礫が50%混入  
 8 10Y R 8分, 黄褐色, シルト質, 可溶性の細砂が90%混入

図8 第1号豎穴住跡(2)

## 第2号竪穴住居跡 図9~12

【位置と確認】 B地区D~F—81~82に位置する。他の住居跡が地表面で落ち込みを確認できたのに対し、本住居跡が立地する周辺は調査前に一部整地されており、ローム面まで掘り下げた時点でそのプランの全容を確認した。また、初期堆積土を掘り上げた時点で、4コーナー付近からは、幅30~40cm、厚さ5cmほどの焼土が検出されており、消失家屋の可能性もある。

【平面形・規模】 東壁辺5.0m、西壁辺5.5m、南壁辺4.9m、北壁辺4.8mで、ややゆがんだ隅丸方形を呈する。かまどを除いた床面積は、25.4m<sup>2</sup>で、主軸方向は、S—13°—Wである。

【壁】 台地の傾斜が東に傾いているため、西壁では、やや急に立ち上がるが、東壁では緩い立ち上がりである。確認面からの壁高も、西壁辺は50~60cmあるが、東壁辺では10~20cmである。壁面は、八戸火山灰の浮石層を掘り込んでいたために、脆くて崩れやすい。

【床面】 床面の状態については、図11に示してある。これによると、主柱穴によって閉まれる部分には、全面5cm程度暗褐色土が貼り床されていて、平坦であり汚れが最も激しい。外側は、西壁付近は、八戸火山灰Ⅰ層を床面にしているために堅い。北壁付近は、八戸火山灰IV層(浮石)を床面としているため、締まりがなく、柔らかい。東壁付近は、八戸火山灰V層を床面としているため、堅く締まりがある。なかでも、東壁の中央部付近が平坦で特にかたく、出入り口の可能性もある。

【柱穴】 竪穴住居跡内で検出したビットは7個ある。このうち、ビット1・2・3・4は、深さが17~48cmあり、また、位置関係からみて主柱穴と思われるが、柱痕は確認できなかった。このなかで、ビット2及び3では、柱穴周辺から白色粘土が検出された。柱を固定するのに用いたものであろう。

ビット計測表

ビットNo	規 模 (cm)	深さ(cm)	ビットNo	規 模 (cm)	深さ(cm)
1	25 × 31	17	5	33 × 42	23
2	33 × 34	26	6	45 × 50	26
3	29 × 30	48	7	60 × 90	46
4	20 × 22	29	8	35 × 42	24

【かまど】 南壁辺の中央よりやや西隅よりの壁を掘り込んで構築している。袖部分は、黄褐色粘土(八戸火山灰Ⅰ層と思われる)のみを用いて構築されており、岩礫や土器などの芯材は使用していない。前庭部は37×60cm、厚さ5cmの範囲で焼土化している。煙道部分は作り替えが行われている。古いかまどは、一旦急に立ち上がるが、煙出し孔にむかって緩やかに傾斜

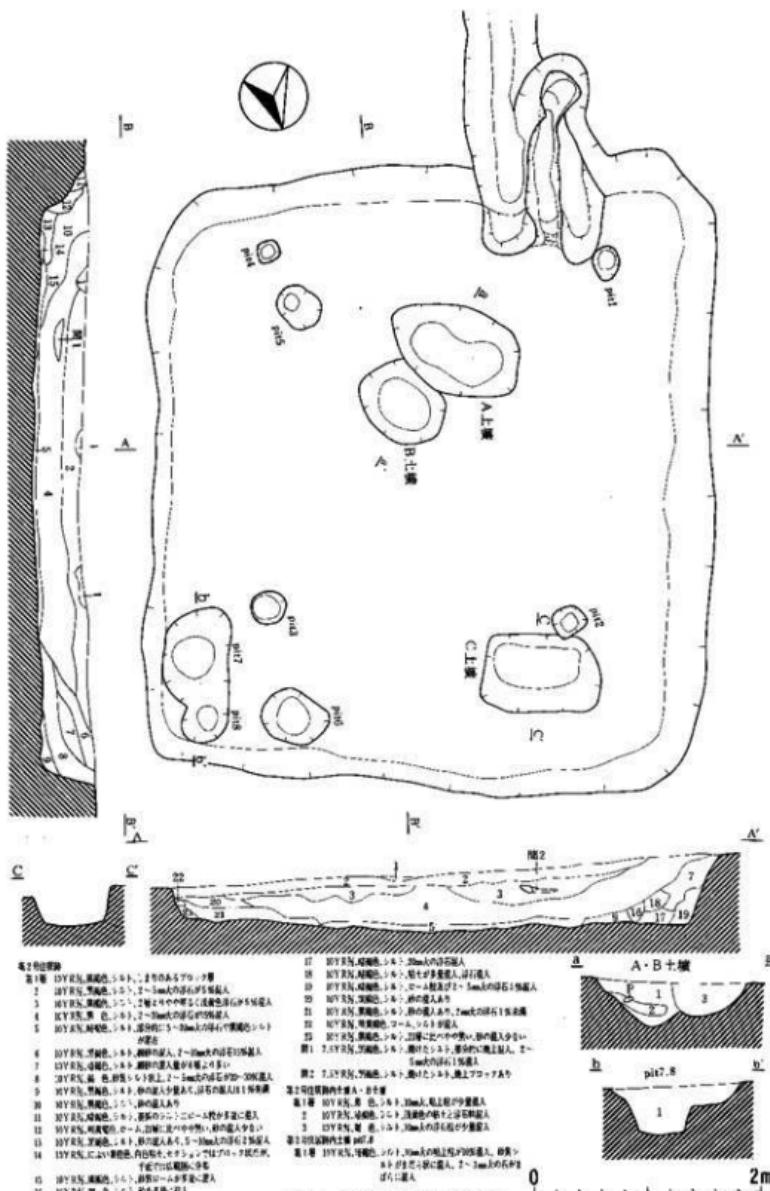


図9 第2号竪穴住居跡(1)

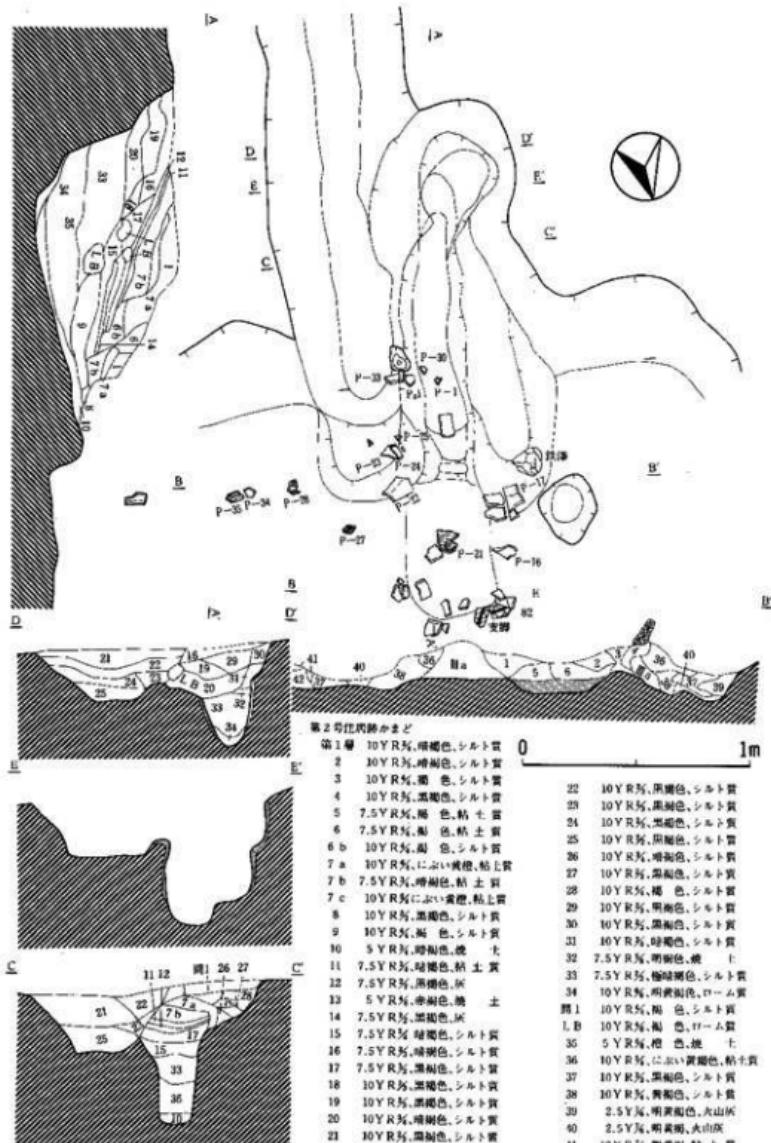


図10 第2号住居跡

し、煙出し孔は、深く掘り込まれている。確認面からの深さは60cmである。かまどの長軸方向は南であるが、煙出し孔はさらに5°西へ湾曲して構築されている。以上から、古い方の煙道部はトンネル式の構造と推定される。新しかかもどは半地下式の構造で、古いかどを壊して、その直上に構築されており、煙出し孔に向って緩やかに立ち上がる。

【覆土・堆積状況】 25層に区分したが、壁付近を除いて基本的には1～4層の自然堆積状態を示す。

【付属施設】 窪穴住居跡内から、3基の土壙が検出された。この中で、Aからは土師器甕の破片が3片出土しており、貯蔵穴に使われた可能性があるが、B、Cについては、本住居跡よりも古い。

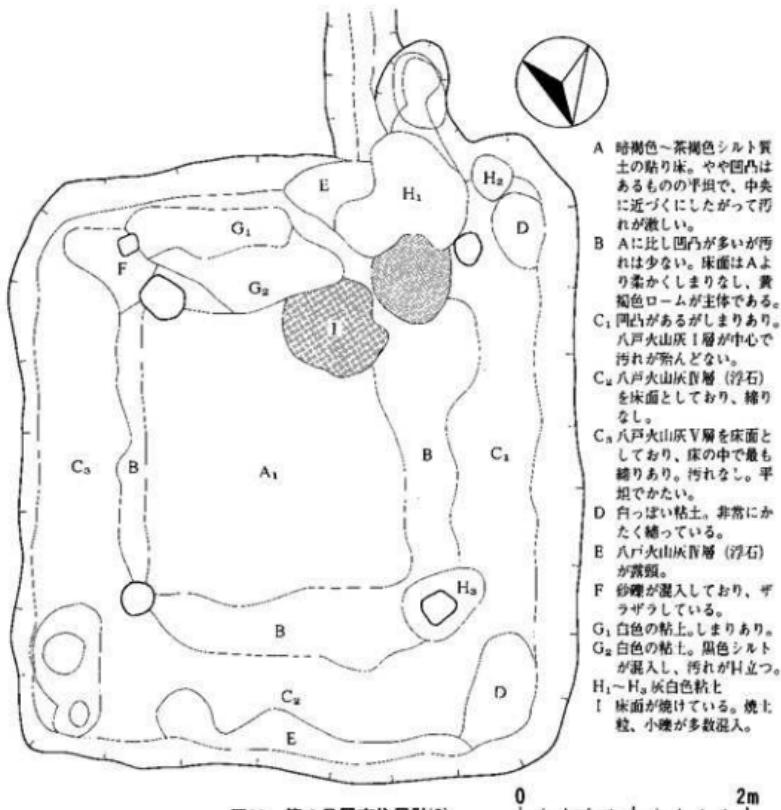
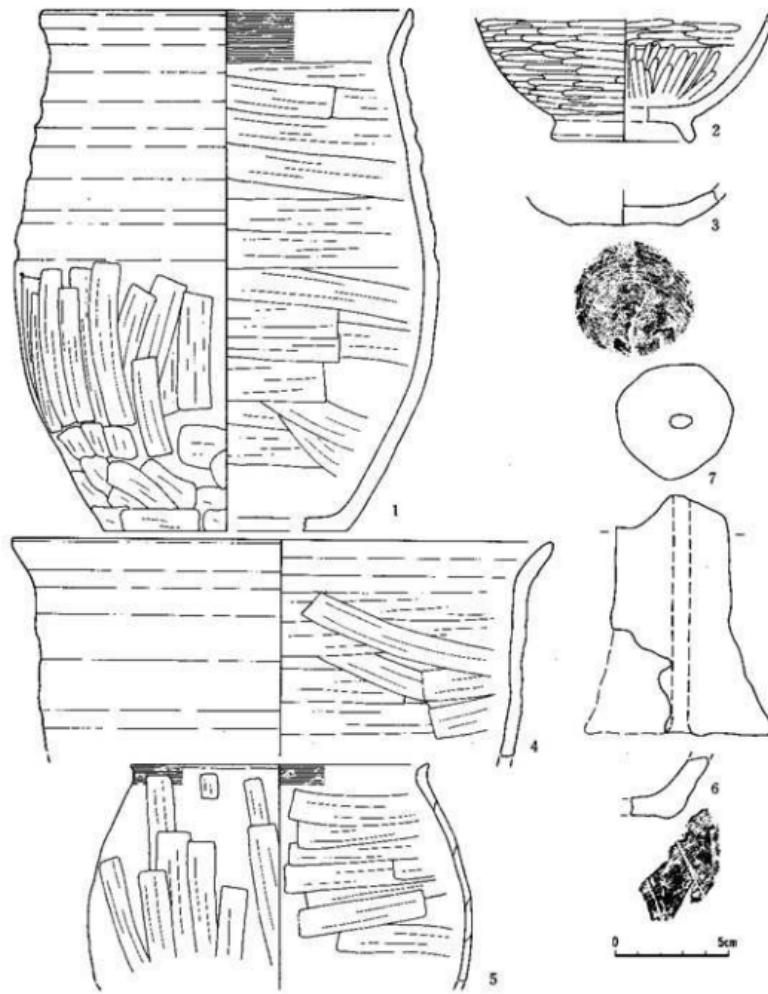


図11 第2号窓穴住居跡(3)



土器一覧表

番号	地図位置	部位分類	外観・文様・裏文の特徴	量鉢番号
1	2号住・かまど直上	略尖部	土加器、要	P-16, 17, 21, 25, 31~35
2	2号住・かまど直上	底部	土加器、环	P-1
3	2号住・かまど直上	底部	土加器、环	P27, 29
4	2号住・かまど直上	口縁部	土加器、要	P-22
5	2号住・かまど直上	口縁部	土加器、要	P-23, 24, 30
6	2号住・壁	底部	土加器、要	No-8
7	2号住・壁	土質	木漬痕	No-4
			高さ10.5cm、幅8.3cm、厚0.8cm	

図12 第2号竪穴住居跡出土遺物

《土壤計測表》

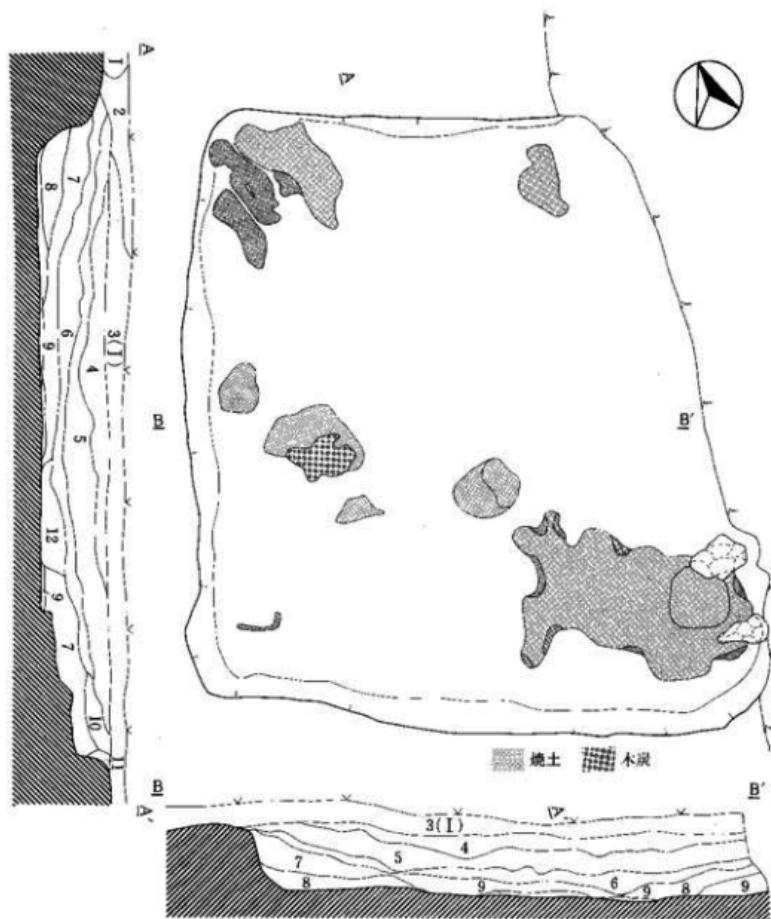
No	長軸×短軸(cm)	深さ(cm)
A	79 × 125	48
B	68 × 80	41
C	70 × 105	32

【出土遺物】 土師器壺・甕が6点(図12—1～6)、土製の支脚1点(図12—7)、鉄滓が5点(写真19—2～4)出土した。その大半が、かまど付近の床面およびかまど前庭部から燃焼部にかけての堆積土中から細片で出土した。1は甕の破片である。口径16.5cmで、口縁部は強く外反し胴部の膨らみが少ない形状である。口縁部から胴部最大径にかけては粗いロクロ成形によると思われる段がついている。胴下半から底部にかけては縦位のヘラナデ、底部付近は斜位ないし横位のケズリがみられる。内面は口縁部がナデ、胴部から底部にかけては横位のヘラナデである。内面には、煤が付着している。4は口縁部の外面にロクロ調整痕が残る以外は、1と同じである。6は胎土から4の底部と思われる破片で、推定底径10cmである。底面には、木葉痕が残る。5はロクロ不使用の甕である。口縁部は内外面指ナデ、胴部外面は縦位のヘラナデ、内面は横位のヘラナデ調整が施される。2は底径6.5cm、推定口径14cm前後の高台付きの壺である。内外面とも入念なヘラミガキ調整が施されている。高台脇には、高台を貼付けた時、指で押さえ付けた痕跡が1周する。3は底径5.3cmの壺底部である。内外面とも無調整、底面には回転糸切り痕がある。7はかまど前庭部底面から出土した土製の支脚である。中央に茅状の芯棒を入れ、てびねりで作り上げたもので、成形時の指の凸凹が著しい。このほか、口径12cmの小形の甕が1点床面から出土している。写真19—2～4は、かまどの煙道部直上からの出土した鉄滓であり、5点出土した。いずれも磁気は帶びず精練滓や油玉とは言いがたいが、鉄製品を作る際に生じた副産物と思われ、当遺跡において鍛冶が行われていたことを物語る遺物であろう。

第3号竪穴住居跡 図13～15 写真11～13

【位置と確認】 B地区中央部D～E—85～87に位置する。土取りによって東側5分の1程度が削り取られ、かまど的一部分の焼土が露出していた。また、地表面からも不整円形のくぼみが確認できた。初期堆積土を30cm削りだした時点で、床面から焼土や木灰が多量に出土したことから、消失家屋と思われる。

【平面形・規模】 残存部から西壁、南壁とも5.2mで、正方形のプランを呈すると思われる。かまどを除いた残存床面積は22.7m<sup>2</sup>であるが、全体ではおよそ24m<sup>2</sup>と推定される。主軸方向は、S—66°—Eであり、第2号、第4号住居跡とは約90°東に向いている。



第3号竪穴住居跡

- 第2層 10YR 5分、黒褐色、腐植土、木根による擾乱。
- 3 10YR 5分、黒褐色、腐植土、基本層序。上層に対応。
- 4 10YR 5分、褐褐色、シルト質。
- 5 10YR 5分、褐褐色、シルト質。
- 6 10YR 5分、褐褐色、シルト質、10YR反復層の浮石粒が少量散在。
- 7 10YR 5分、褐褐色、シルト質、浮石粒 (10YR反復層 2~5 mm) 2箇散在。
- 8 10YR 5分、褐褐色、シルト質、10YR反復層の粒 (10mm大) が点在、砂質。
- 9 10YR 5分、褐褐色、シルト質。
- 10 10YR 5分、黒褐色、シルト質。
- 11 10YR 5分、褐褐色、シルト質。
- 12 10YR 5分、褐褐色、シルト質、10YR反復層の粒 (10mm大) が点在、砂質。

0 2m

図13 第3号竪穴住居跡(1)

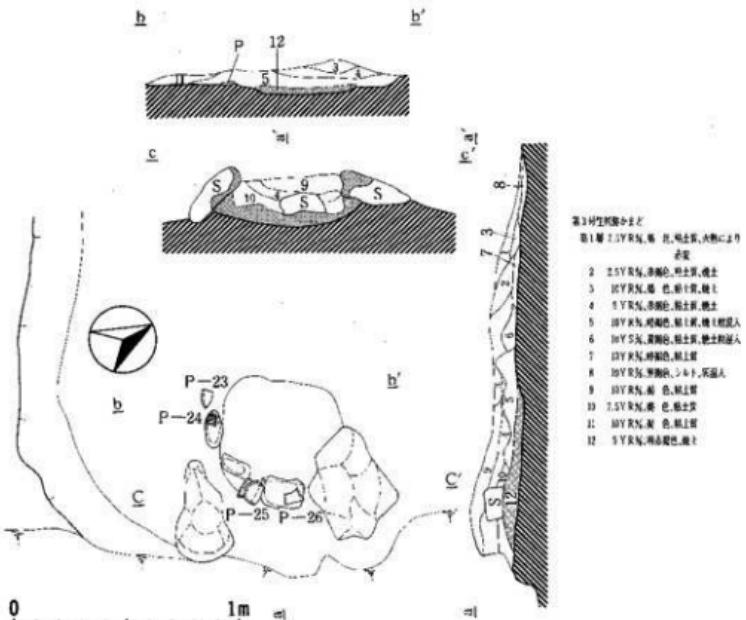
【壁】 第IV層（八戸火山灰層）を掘り込んで壁としている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がり壁高は約50cmである。

【床】 ゆるく東方へ傾斜している地形に立地しているため、掘り方の床面もやや東側に傾斜している。そのため、床には暗褐色シルト質土を全面に貼って、平坦に踏み固めている。

【柱穴・ピット】 堪穴住居跡内では柱穴と思われるピットは存在しなかった。ただし、性格不明のピットが8個検出された。

ピット計測表

ピットNo	規 模 (cm)	深さ (cm)	ピットNo	規 模 (cm)	深さ (cm)
1	60 × 73	33	2	33 × 54	11
3	61 × 85	13	4	62 × 73	15
5	70 × 80	25	6	41 × 110	18
7	36 × 60	11	8	70 × (75)	30



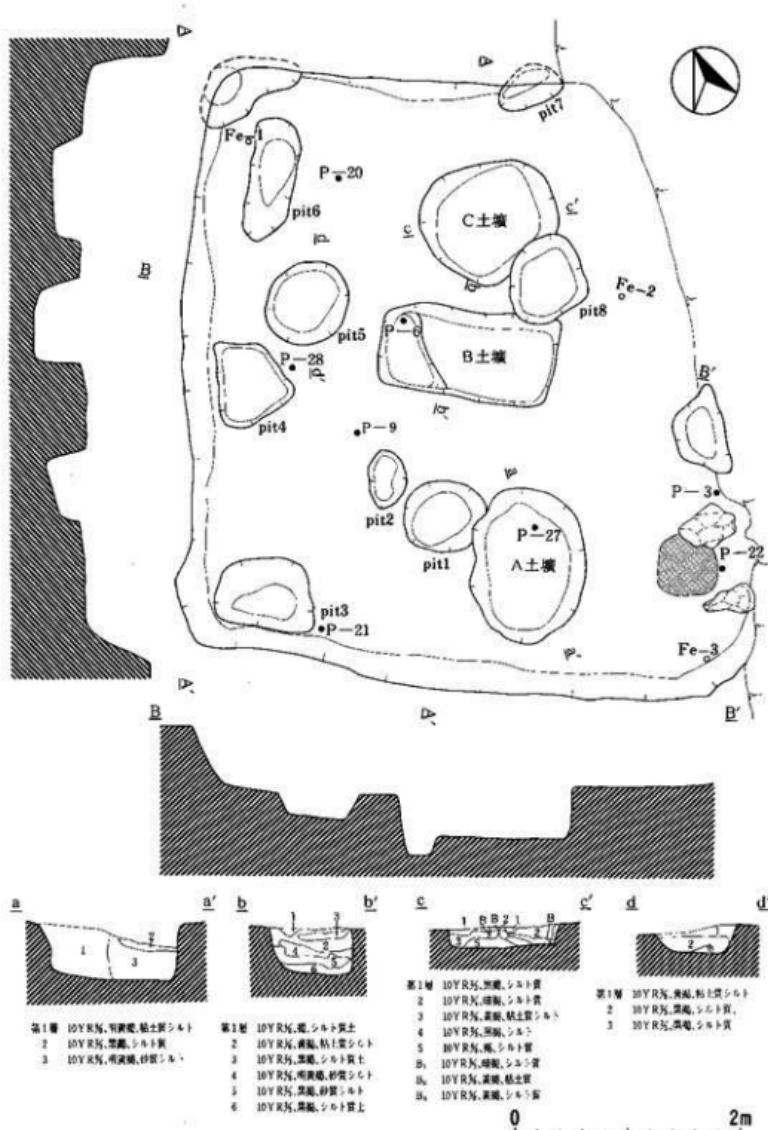
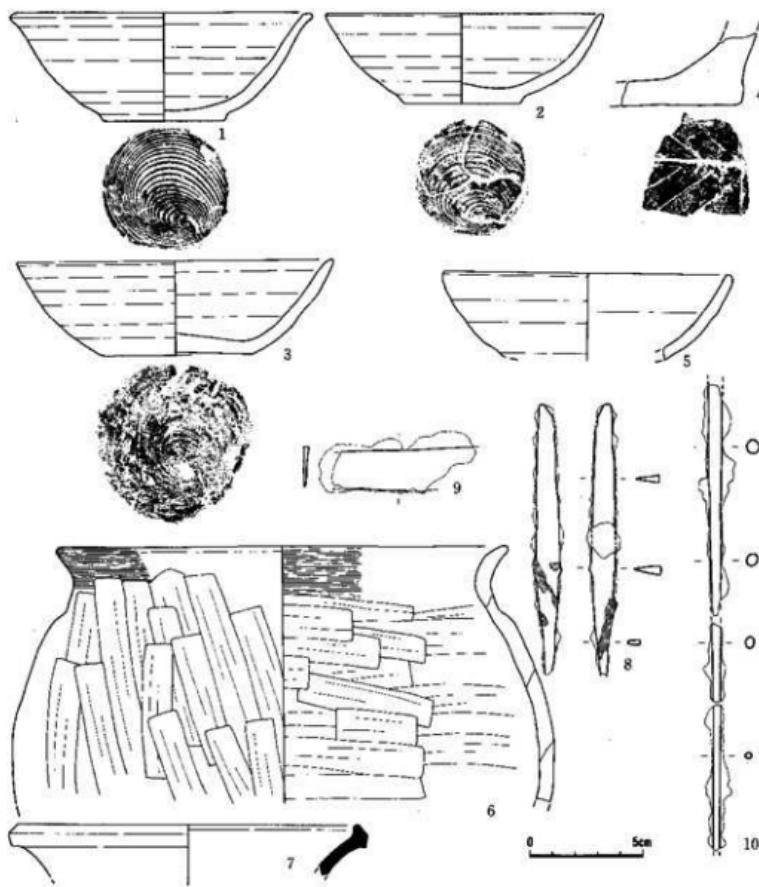


図15 第3号竪穴住居跡(2)



土器一覽表

番号	地区	層位	部位	分類	外觀文様施文の特徴	量標番号
1	3H・今まど	略完形	土師器・环	ロクロ使用 底面・系切痕		No.4 (P-22, 25)
2	3H・族	略完形	土師器・环	ロクロ使用 底面・系切痕		No.2 (P-28)
3	3H・木	略完形	土師器・环	ロクロ使用 底面・系切痕		No.3 (P-30)
4	3H・ワタ	底 部	土師器・甕	木蓋底		P-9
5	3H・H土器面	口縁部	土師器・环	ロクロ使用 岩面・系切痕		P-3
6	3H・かまど	口縁部	土師器・甕	LJ管部内外面ナメ 制部ヘラナメ		P-27, 23, 26
7	3H・灰	口縁部	陶器灰灰陶灰	口縁部内底 周灰跡		P-21
8	3H・灰	月 千		刃形長7.4cm、莖部長4.7cm、片幅0.4cm		Fe-1
9	3H・灰	穀篩具		残存部長6.4cm、直径0.2cm		Fe-2
10	3H・灰	穀篩車		残存部長20.8cm、輪径0.6cm		Fe-3

図16 第3号竪穴住居跡出土遺物

【かまど】 東壁の中央部より南側寄りに位置する。前庭部から燃焼部にかけてと袖石が残存する。前庭部は5cmほどの厚さまで焼土化している。袖部は45~50cmのシルト岩を芯材としてそれに粘土を貼って構築している。長軸方向は、S-78°-Eであり、主軸に対して12°南側に向いている。

【覆土・堆積状況】 壁際を除き自然堆積状態を示し、12層に区分できた。褐色～黒褐色系のシルト質土が主体であり、床面に近づくにしたがって、八戸火山灰層中の浮石やローム粒の混入量が増す。

【付属施設】 床面より土壤が4基検出された。このうち、B号土壤の底面出土の土師器の甕の口縁部とかまど出土の同口縁部が接合したことから、本住居跡に伴う可能性がある。他は不明である。

土 壤 計 測 表

No	長 軸 × 短 軸 (cm)	深 さ (cm)
A	97 × 140	57
B	75 × 156	48
C	115 × 123	30
D	72 × 80	25

【出土遺物】 土師器甕・坏片が9個体分(図16-1~6)、須恵器1片(図16-7)、鉄製品3点(図16-8~10)が出土した。1は坏である。かまど燃焼部の袖石を覆っている粘土直上から出土した。ロクロ使用で口縁部が緩く外反する。口径13.5cm、器高4.8cmで内外面無調整、底面には、回転糸切り痕が明瞭に残る。2・3・5も器体の調整は1と同じであるが、3の底部切り離しはやや稚である。6はかまどおよびB号土壤底面出土の口縁部破片が接合したものである。推定口径20.2cm、口縁部は緩く外反して立ち上がり、やや胴部が膨らむ甕の破片である。器面調整は、口縁部が内外面ともナデ、胴部は外面継ぎのヘラナデ、内面は横位のヘラナデである。4は6の底部と思われる。推定底径10cmで、底面に木葉痕がある。このほか、ピットの覆土からは内外面入念なミガキの後黒色処理が施されている坏口縁部片と甕口縁部片が2片ある。7はピット1からの出土で、須恵器長頸甕の口縁部である。推定口径は16cmで、口唇部の引き出しや胎土は五所川原窯跡群の前田野目系長頸甕に極めて近い。8は北西隅の床面直上から出土した鉄製品で、やや細身ではあるが、小形の「刀子」である。刃部の長さ7.4cm、闊幅1.3cm、背の厚さ0.4cmである。刃部に対し、茎は4.7cmと短い。背闊、刃闊とも無角式である。9は、東壁側床面から出土した。両端が折損していて、全容は不明であるが、極めて薄手の鉄製品であり背および刃部があることから、刀物と判断される。残存長6.4cm、背幅0.2cm、刃幅1.8cmであり、穂摘み具の一種と思われる。10は、南側床面から出土した。鋲の噴き出しが多く原形を留どめないため、製品を断定はできないが、紡錘車の心棒の可能性が

ある。残存長20.8cm、軸の最大径は0.6cmである。

#### 第4号竪穴住居跡 図16~18 写真14~15

【位置と確認】 C地区B~C-93~95に位置する。調査した竪穴住居跡としては最も北にあり、標高23m付近に立地する。直径6m、深さ0.6mの円形のくぼみとして、地表面で確認した。

【平面形・規模】 東壁辺4.5m、西壁辺4.1m、南壁辺3.8m、北壁辺0.4mのゆがんだ方形を呈する。かまどを除いた床面積は、16m<sup>2</sup>で、主軸方向は、S-7°-Wである。

【壁】 各壁とも八戸火山灰IV~V層を掘り込んで壁面としている。確認面からの壁高は、35~40cmで、やや急な角度で掘り込まれている。東壁は、中央部付近が階段状になっている。

【床面】 床面の状態については、図18に示してある。これによると、八戸火山灰V層を床面としている西側半分の床は汚れも少なくかたいが、八戸火山灰IV層を床面としている北東壁周辺は、粒径の大きい浮石が露出しており床面も締まりがなく、柔らかい。また、主柱穴と思われる2ピットの内側は、黒褐色シルト質土を基質としており、場所によって地山のロームや浮石を混入する。また、東壁辺中央部よりやや南側が張り出し状になっているが、その周辺の床面は平坦でかたく汚れが激しい。出入り口の可能性もある。

【柱穴】 2個のピットを検出した。いずれも、柱痕は確認できなかったが、配置から見て、主柱穴と思われる。

ピット計測表

ピットNo	規 模(cm)	深さ(cm)	ピットNo	規 模(cm)	深さ(cm)
1	32×34	25	2	12×19	22

【かまど】 南壁辺の中央よりやや西隅よりに構築されている。煙出しつらから燃焼部にかけ、近年の土地境界溝が通るために、上面は削平されている。残存している部分から、袖部は粘土で構築されたと思われる。煙道部は、煙出し孔に向かって緩やかに上昇しており、側壁には粘土が貼られていることから、半地下式の構造と思われる。長軸方向は、S-3°-Wで、第2号住居跡と同じく、南方向を向く。

【覆土・堆積状況】 13層に区分でき、自然堆積状態を示す。

【出土遺物】 遺物は、1点も出土しなかった。

(赤平智尚)

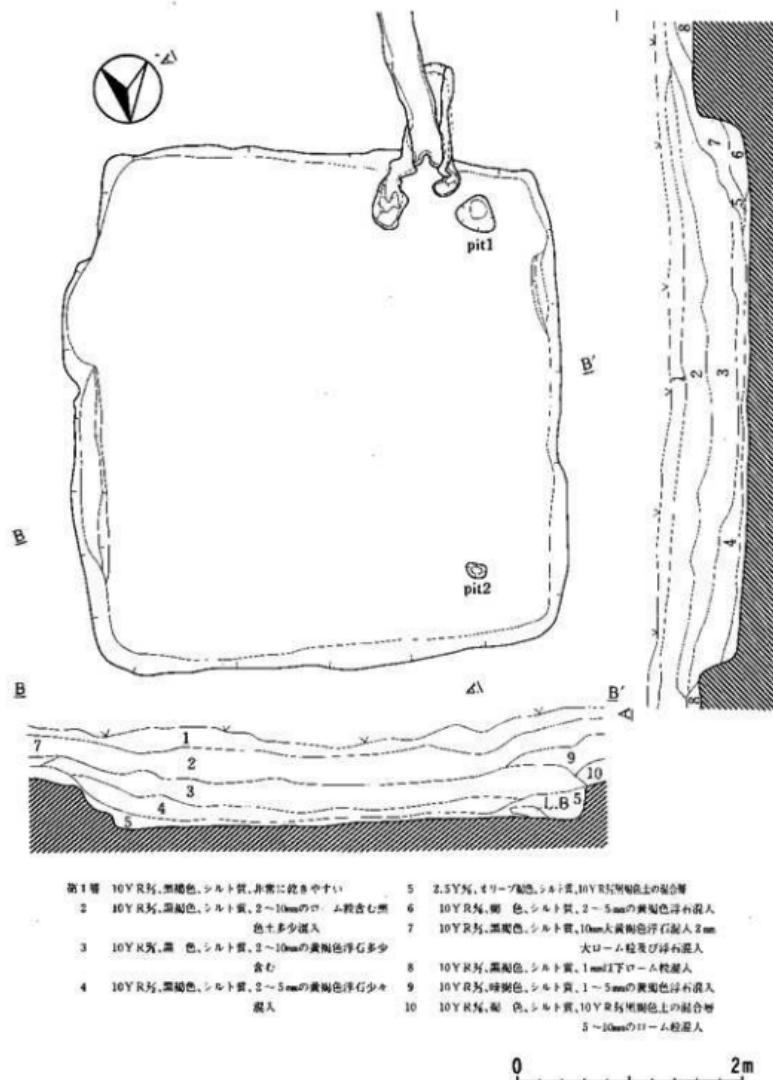


図17 第4号竪穴住跡(1)

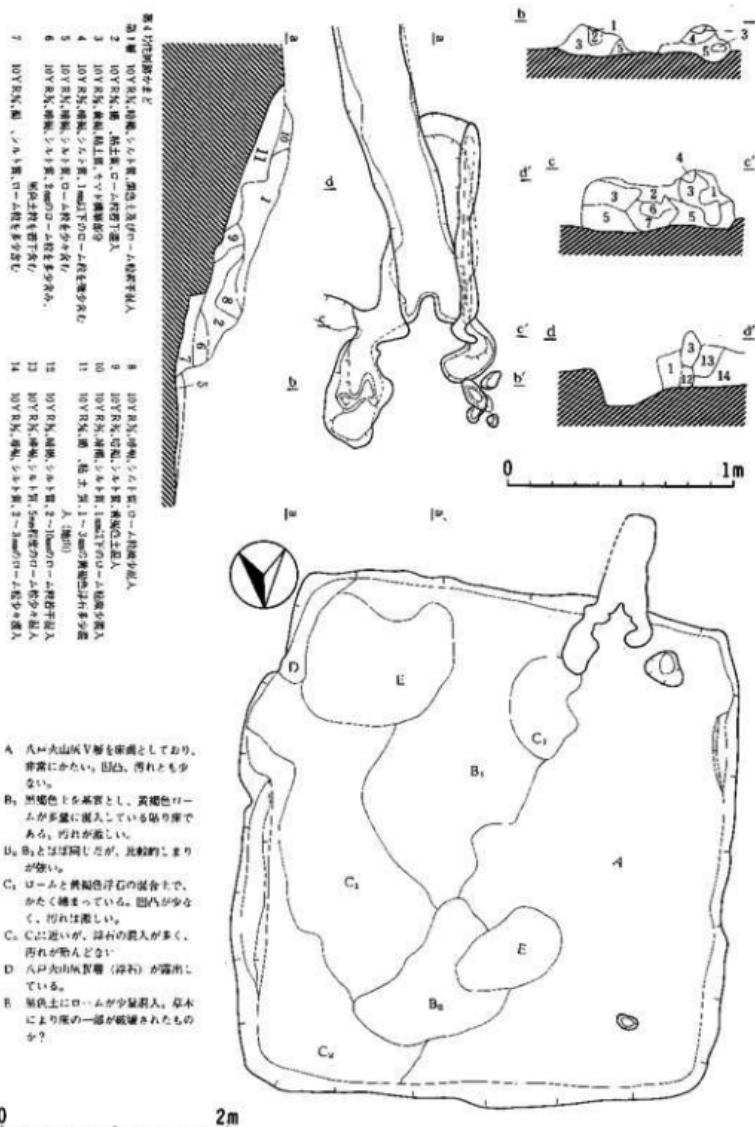


図18 第4号竪穴住跡(2)

## 第2節 土

壌 図19 写真16~17

4基検出した。いずれも調査区の南側、B地区に位置する。第2号土壤以外は方形のプランをしており、また、第3号堅穴住居跡の周囲に立地することから同住居跡との関係が窺える。

### 第1号土壤

B地区D～E-87に位置する。第3号堅穴住居跡の北壁邊に、ほぼ平行して構築されており、約130cm離れた位置にある。第II層掘り下げ中に、地山のロームが多量に混入する長方形の落ち込みを確認した。規模は、開口部135×198cm、壌底部110×181cmで、深さは遺構確認面から95cmである。壁は八戸火山層を掘り込んでおり、立ち上がりは、ほぼ垂直である。また、底面は平坦である。堆積土は黄褐色の地山ロームが多量に混入する褐色シルト質土が主体で、人為的に埋め戻したと思われる。

### 第2号土壤

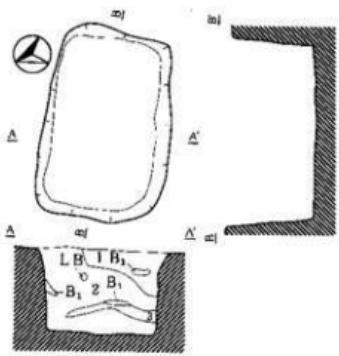
B地区E-103に位置する。検出された遺構としては、最も高い標高24メートル付近に立地する。規模は、開口部153×213cm、壌底部63×140cmで、深さは34cmと浅い。壁は、緩く立ち上がり、舟底状を呈する。堆積土は、暗褐色土のシルト質土が主体で、底面直上に黒色土がブロックで入っている。1層上面には、ロームブロックおよび焼土粒が、また、2層中には炭化物粒が多量に混入することから、人為的に埋め戻したと思われる。

### 第4号土壤

B地区F～G-86に位置する。第3号堅穴住居跡西壁邊にはほぼ平行して構築されており、第1号土壤とは長軸方向で直交する位置にある。第II層を掘り下げ中に、褐色でプラン不明瞭な不整規円形の落ち込みとして確認した。規模は、開口部125×224cm、壌底部は85×192cmで、深さは83cmである。壁は、やや外側に開きながら立ち上がるが、壁面の中央部付近に棚状の掘り込みが全周するのが特徴である。この掘り込みは、東壁22cm、西壁29cm、南壁25cm、北壁14cmであり、堆積土も人為的に埋め戻された明黄灰色ロームが多量に混入する単一層であることから、本土壌を構築する際に掘り込まれた可能性が強い。また、棚状に掘り込まれた部分の底面には、明黄褐色粘土が盛られている。

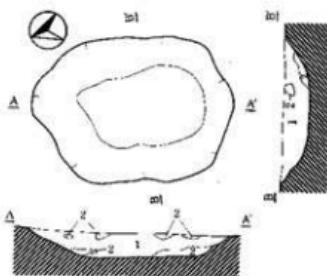
### 第5号土壤

B地区F-87に位置する。第3号堅穴住居跡の北西コーナーの延長線上にあり、第1号土壤



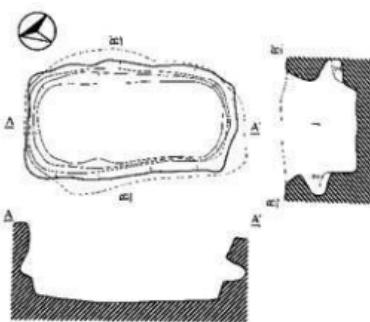
第1号土壤

第1号  
第1層 IGY粘土層、シルト、1~3mmの黄褐色の腐植、表面2~3mm多少  
2 IGY粘土層、シルト、2~3mmの粘土、表面2mm多少  
3 IGY粘土層、シルト、2~10mmのコーム状の白色の腐植を含む  
B<sub>1</sub> IGY粘土層、シルト、2~3mmの白色の腐植を含む



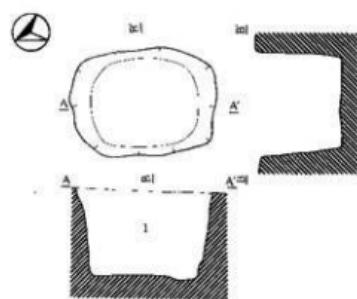
第2号土壤

第2号  
第1層 IGY粘土層、シルト、1~5mmのローム層、2~3mmの腐植層  
B<sub>1</sub> 天然  
2 IGY粘土層、シルト、氧化物を含む、ローム層少々含む



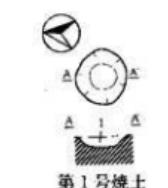
第4号土壤

第4号  
第1層 IGY粘土層、シルト、5mmの褐色の腐植層とIGY粘土層  
2 IGY粘土層、シルト、1mm以下の白色土層多少混入



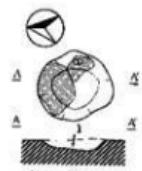
第5号土壤

第5号  
第1層 IGY粘土層、シルト、10~50mmの褐色の腐植層とIGY粘土層混入



第1号焼土

第1号  
第1層 IGY粘土層、シルト、表面2~3mmの褐色土層多少混入



第2号焼土

第2号  
第1層 IGY粘土層、シルト、表面2~3mmの褐色土層多少混入

0 2m

図19 土壤・焼土構造

および第4号土壙の長軸線が交わる付近に構築されている。それぞれの遺構までの距離は、第3号住居跡まで1.3m、第1号土壙まで1.7m、第4号土壙まで2.3mであり、ほぼ近接している。第1、第3号土壙と同じく、第II層を掘り下げ中に、隅丸方形の褐色の落ち込みを確認した。規模は、開口部112×150cm、壙底部95×113cmで、深さは93cmである。壁の立ち上がりは、ほぼ垂直である。堆積土は、肉眼で観察する限り、第4号土壙と極めて類似する。同時期に人為的に埋め戻された可能性がある。

(赤平智尚)

土 壙 一 覧 表

番 号	グ リ ッ ド	平 面 形	計		測 値 (cm)	
			開 口 部	壙 底 部		
1	D～E-87	長 方 形	135 × 198	110 × 181	95	
2	E-103	不整円形	153 × 213	63 × 140	34	
4	F～G-86	長 方 形	125 × 224	85 × 192	83	
5	F-87	長 方 形	112 × 150	95 × 113	93	

### 第3節 焼 土 遺 構 図19

B地区南側において、2基検出した。

**第1号焼土遺構** 調査区A-73に位置する。本遺構の北側2mの地点には、第1号竪穴住居跡がある。そのプラン確認作業中に、ほぼ円形のプランを確認した。53×58cmの規模で、深さ10cmと浅く掘り込まれている。堆積土中には、粒径5～6mmの焼土粒が点在している。出土遺物はなし。

**第2号焼土遺構** 調査区D～E-80に位置する。本遺構の北側7mの地点には、第2号竪穴住居跡がある。第I層（表土）を剥いた時点で、部分的に赤変している黒褐色の円形の落ち込みを確認した。規模は、73×80cmの稍円形で、確認面から13cm掘り込まれている。堆積土は黒褐色のシルト質土で、部分的に火熱を受けて赤変している。堆積状況から、人為的と思われる。床面上付近には、土師器甕の破片が2点出土している。

#### 第4節 溝状ピット 図20 写真17-3

B地区F～G-66に位置する。調査区では最も南側の台地の先端部で、標高は16m付近である。東側半分は崩落しているため全容は把握できなかったが、平面形態および断面から、溝状ピットやT（トラップ）ピットと呼称される遺構と同一のものである。遺構確認のためのトレンチをいたところ、第Ⅲ層上面で黒色の細長い落ち込みを確認した。残存する部分から想定して、平面形状はやや中央部が広くなり、細長い葉巻型を呈する。開口部は、長軸は、上端で250cm以上、下端で280cm以上であり、その断面形状は、袋状を呈する。また、短軸は、上端で75cm、下端で27cmであり、断面形状は、「V」字状を呈する。底面の状態は堅く、平坦である。ピットの長軸方向は、W-8°-Nで、ほぼ真西方向を向いており、台地の傾斜に対してても、直交する形で配置されている。通常、構状ピットは複数が連繋して機能を果たすように構築される例が多く検出されているが、調査区内では他に確認はされなかった。溝状ピットが多く検出された遺跡として、南へ3kmに長七谷地貝塚、同じく南へ4kmに和野前山遺跡があり、それぞれ、101基、108基が検出されている。

(赤平智尚)

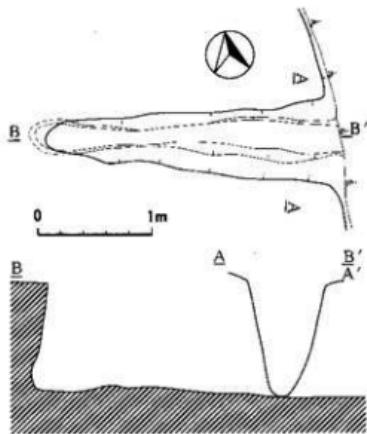


図20 溝状ピット

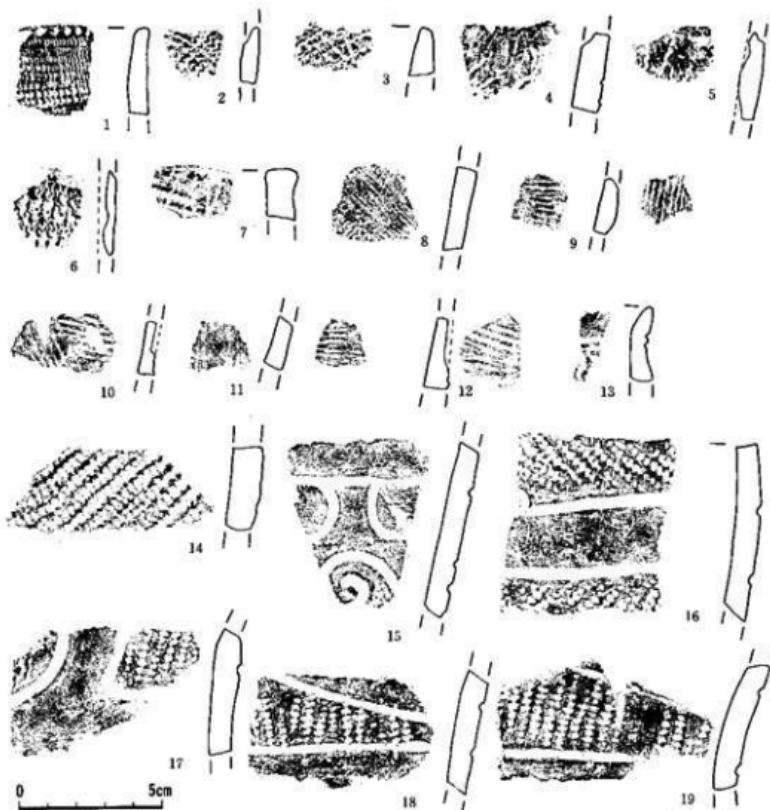
## 第V章 遺構外の出土遺物 図21-1~19 写真20~21

遺構外から出土した遺物は土器が約30点であるが、小破片資料が多く復原可能なものは1点もない。また、発掘調査前の遺跡周辺の分布調査で表面採集した遺物も数点あるので、この項で一括して述べる。これらの中には、縄文時代早期、前期および後期の土器および平安時代の土師器の破片がある。

**縄文時代の遺物** 1~13は貝殻文を主な施文の特徴とする縄文早期の土器群である。いずれも、調査区B地点に連続する東側の蔬菜畑で採集した。このうち1・2は、貝殻の腹縁部を押し当てて、連続的に横位に押しながら引きする貝殻腹縁押し引き文を施文した土器である。1は口縁部であり、平坦口縁の棱に刻み目がつけられている。3~7は、貝殻の腹縁部を器面に押し当てながら交互に移動させる貝殻腹縁連続波状文を施文した土器である。3は口唇部に刻み目、口縁部には斜位に押し当て、横位に移動している。7は、平坦口縁で縦位に押し当て、横位に移動している。これらの内面は、横位ないし斜位の貝殻条痕文が施文されている。8~12は、内外面とも貝殻条痕文が施文されている。13は、小破片であるが、口唇部に刻み目、口頭部に2条の沈線文が巡る。貝殻文を主体とするこれらの土器群は、縄文時代早期中葉の吹切沢式の周辺であろう。14は、R L斜縄文が施文される深鉢形土器の胴部片である。胎土中に植物纖維が多量に混入しており、前期の土器と思われる。15~19は、B地区の第3号堅穴住居跡南側周辺から出土した土器である。いずれも深鉢形土器の口縁部または胴部の破片である。沈線文が主体で、15をのぞき、すべて沈線で区画したのちに縄文を充填しており、同一個体の可能性がある。15は胴上部破片で、横位の沈線と渦巻き状の文様を施文している。16は、口縁部破片で平縁であり口唇部、内面とも丁寧な横ナデ調整がなされている。これらの土器は、胎土や施文技法から後期初頭に位置付けられる。

**平安時代の遺物** 土師器の壺と甕の破片が15片ある。いずれも細片のため器形の全体は不明であるが、壺はロクロ使用で器面無調整が大半であり、甕はロクロ未使用の小形のものとロクロ使用で口縁部が外反するものがある。9世紀後半から10世紀ころのものであろう。

(赤平智尚)



土器観察表

番号	地区・層位	部位	時 期	内 外 図 の 特 徴
1	赤 砂	上縁部	早明中葉	口界面 刃み日、貝齒痕付引込
2	赤 砂	柄 部	早明小葉	刃切痕付引込
3	赤 砂	上縁部	早明中葉	口切痕 刃み日、貝齒痕連続波状文
4	赤 砂	柄 部	早明中葉	刃切痕連続波状文
5	赤 砂	側 部	早明小葉	刃切痕連続波状文 内面一系痕
6	赤 砂	柄 部	早明中葉	刃切痕連続波状文
7	灰 砂	上縁部	早明中葉	平縁口付、貝齒痕連続波状文、内面 亂痕
8	灰 砂	側 部	早明中葉	内外面全痕
9	赤 砂	側 部	早明小葉	内外面全痕
10	赤 砂	側 部	早明小葉	全痕
11	赤 砂	側 部	早明小葉	内外面全痕
12	灰 砂	側 部	早明小葉	剥離? 内面一系痕
13	赤 砂	上縁部	早明中葉	口切痕 刃み日、2重の波織
14	赤 砂	側 部	前	「L」形彫文 地面混入
15	ビ-83	側 部	後切痕部	凹縫文 混合文
16	赤地区	口縁部	後切痕部	凹縫口縁、沈縫+R.L.丸痕織文
17	赤地区	側 部	後切痕部	沈縫+R.L.丸痕織文
18	赤地区	側 部	後切痕部	沈縫+R.L.丸痕織文
19	赤地区	側 部	後切痕部	沈縫+R.L.丸痕織文

図21 遺構出土土器

## 第VII章 ま　と　め

- 1 下谷地[1]遺跡は奥入瀬川下流左岸の標高約25mの上北台地上に立地する。遺跡はA・B二つの地区に分れ、今日でもまだ埋まり切らない平安時代の竪穴住居跡群が存在する。A地区では56箇所に、また、そこから南東に約300m離れたB地区には10箇所にくぼ地が確認されている。
- 2 調査は2ヵ年にわたって実施された。A地区では調査予定地が集落の東端をかすめたにすぎず遺構が検出されなかつたものの、竪穴住居跡群に伴うものと推定される土師器及び須恵器の破片資料を得た。この他、量は少ないものの縄文時代早期中葉の貝殻文土器も出土した。
- 3 またB地区では、地表面から確認できる4軒の平安時代の竪穴住居跡を精査し、これに伴う貯蔵庫と推定される3基の土壙を検出した。この他、所属時期が不明であるが、狩猟用の落し穴と推定される構状ピットも1基検出した。
- 4 B地区からは縄文時代前期、後期の土器及び石器も少量出土したが、調査予定地内に集落を構えた痕跡は無い。狩猟・採集の場としてのみの使用であった可能性が高い。

(三浦圭介・赤平智尚)

## [付 篇] 遺跡の分布調査

下谷地[1]遺跡付近を通る広域農道の予定路線内の埋蔵文化財包蔵地有無の確認のため、昭和59年9月6日（木）、当文化課一町田 工埋蔵文化財班長と同班福田友之主査、県農林部土地改良第二課小田切 幹農道班主任主査および上北土地改良事務所川村英幸農道係長らで現地調査を行なった。

調査は予定路線内と周辺地域の踏査であり、専ら地表面の観察を主としたが、樹木と木の葉により、表面観察は殆ど不可能であったため、予定路線東側の畠地において表面観察を行なった。

その結果、図一2の予定路線のA—B地区間境界東側の道路から南側60mの地域にかけて縄文土器、土師器の小破片と石器剥片が散布しているのが確認され、さらに南側10~50mの地域には縄文時代早・前期の土器片と石器が散布しているのが確認された。これらの地域は予定路線からはわずか40~70mしか離れていないため、地形的にみて、予定路線内まで包蔵地が広がっているものと推定された。

採集遺物のなかで図示しうるものを図一22にまとめることにする。

1~3の土器は貝殻文が施されたもので、胎土に微細縫を含み、硬質である。外面は灰褐色を呈する。いざれも貝殻腹縫を横にずらしながら押しつけたもので、3は斜位の貝殻条痕文を併用している。1・3の内面には斜位に貝殻条痕文が施されている。4~7の土器は貝殻条痕文が施されたもので、大半が斜位に施されているが、6は横位のものが併用されている。胎土は7のみが植物繊維を含むが他は含まない。いざれもやや硬質で色調は橙・褐色を呈する。8・10は土器の底部付近の無文部分と思われるもので、1~3の土器の胎土に類し、やや硬質で橙色を呈する。9は横（斜？）位に縄文が施されたもので、胎土に植物繊維を多量に含み軟質である。色調は外面が黄橙色で、内面が黒色である。外面は若干摩滅している。ほか石器については、11は硬質頁岩製の有茎石鏟であり、縦長3.8cm、幅1.5cm、厚さ0.7cmである。基部にはアスファルト等の接着剤の付着は認められない。12は安山岩製の石錐である。扁平な河原石の両端に両側から抉りを入れて縄掛けとしたもので、上端に敲打痕がみられる。縦長6.7cm、横長7.0cm、厚さ2.2cm、重量140gである。

以上の遺物のなかで1~3の土器は縄文時代早期中葉の吹切沢式に比定される。4~8・10の土器もこれと同一型式かあるいは前後する時期のものであろう。9の土器は縄文時代前期初頭の早稻田6類土器に比定される。11・12は縄文時代の石器であるが、12は六ヶ所村新納屋[2]遺跡の吹切沢式土器に伴出した石錐に酷似しており、吹切沢式土器に伴なった可能性が強い。

(青森県立郷土館学芸員 福田友之)

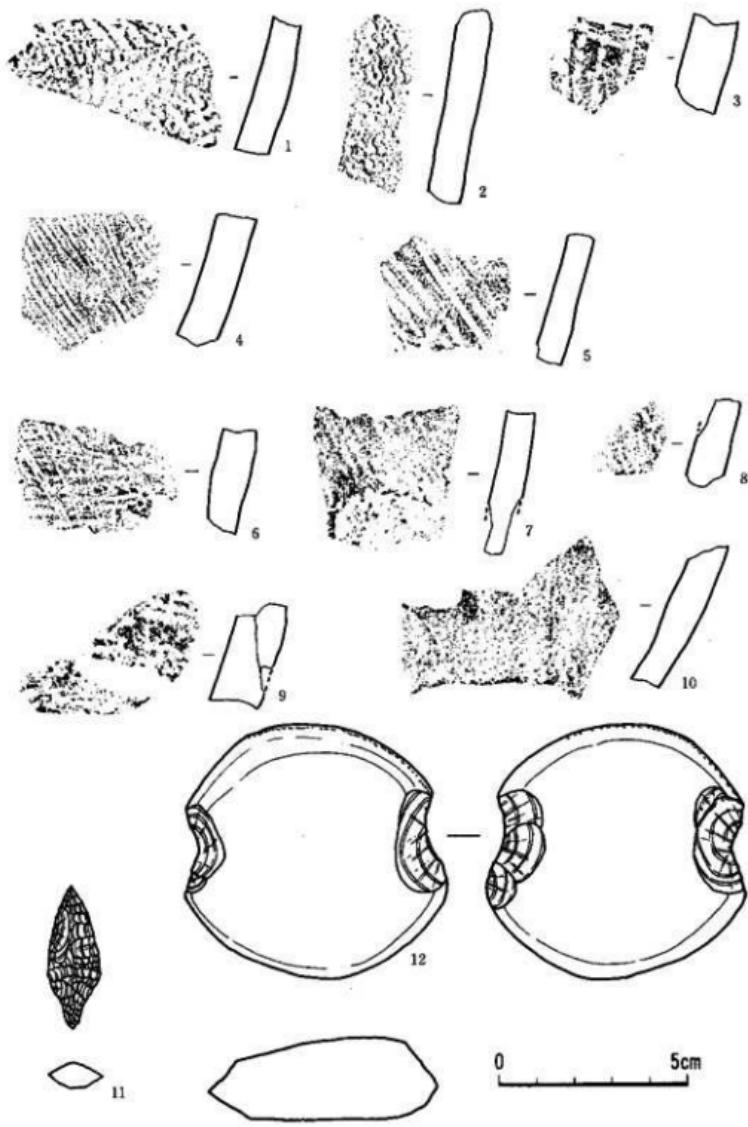


図22 分布調査による表面採集資料

### 引用参考文献

- 青森県教育委員会 1978 「青森市三内遺跡」 青森県埋蔵文化財調査報告書 第37集  
〃 1980 「板留[2]遺跡」 〃 第59集  
〃 1980 「長七谷地貝塚」 〃 第57集  
〃 1982 「発茶沢遺跡」 〃 第67集  
〃 1984 「和野前山遺跡」 〃 第82集  
〃 1986 「沖附[1]遺跡」 〃 第100集
- 阿部 義平 1971 「クロコ技術の復元」 考古学研究 18卷2号
- 新谷 武 1981 「五所川原周辺の須恵器窯跡出土の長頭壺について」 弘前大学考古学研究1号
- 江上・桜井・関野 1958 「館址—東北地方における集落跡の研究」 東京大学出版会
- 岩見 誠夫・船木 義勝 1985 「秋田県の須恵器および須恵器窯の編年」 秋大史学 32号
- 氏家 和典 1957 「東北土師器の形式分類とその編年」 歴史 14 東北史学会
- 工藤 雅樹・桑原 滋朗 1972 「東北地方における古代土器生産の展開」 考古学雑誌 57卷3号
- 桑原 滋朗 1976 「須恵系土器について」 東北考古学の諸問題  
〃 1977 「津軽で作られた須恵器」 考古風土記 2号  
〃 1986 「律令時代—津軽で焼かれた須恵器—前田野目窯跡」 発掘が語る日本史
- 坂詰 秀一 1975 「津軽前田野目窯跡群をめぐる課題」 北奥古代文化 7号
- 桜井 清彦 1958 「東北地方北部の土師器と竪穴に関する諸問題」 館址
- 下田町 1979 「下田町誌」
- 三辻 利一・松山 力ほか 1983 「青森県下の遺跡に堆積する火山灰の螢光X線分析」
- 三浦 圭介 1982 「青森県における奈良、平安時代土器編年一覧」 青森県考古学会資料
- 村越 潔・新谷 武 1974 「青森県前田野目砂田遺跡発掘調査概報」 北奥古代文化 4号



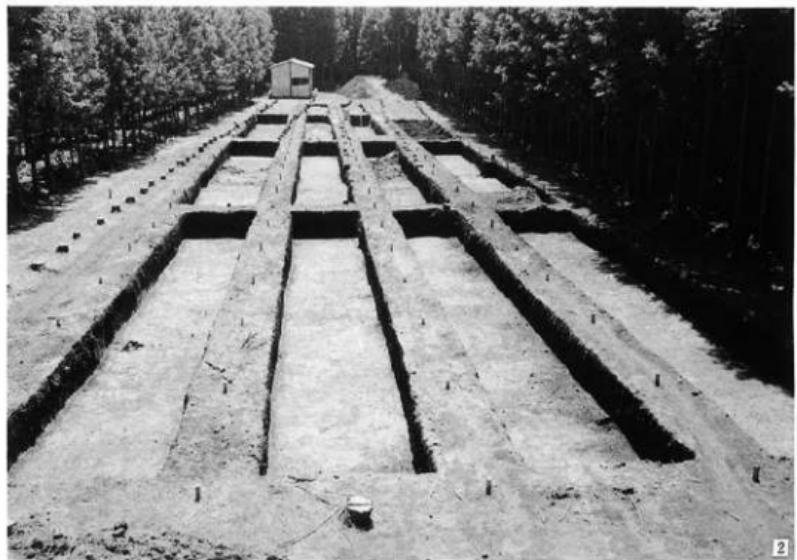


写真1 下谷地(1)遺跡A地区全景(1—南より 2—北より)

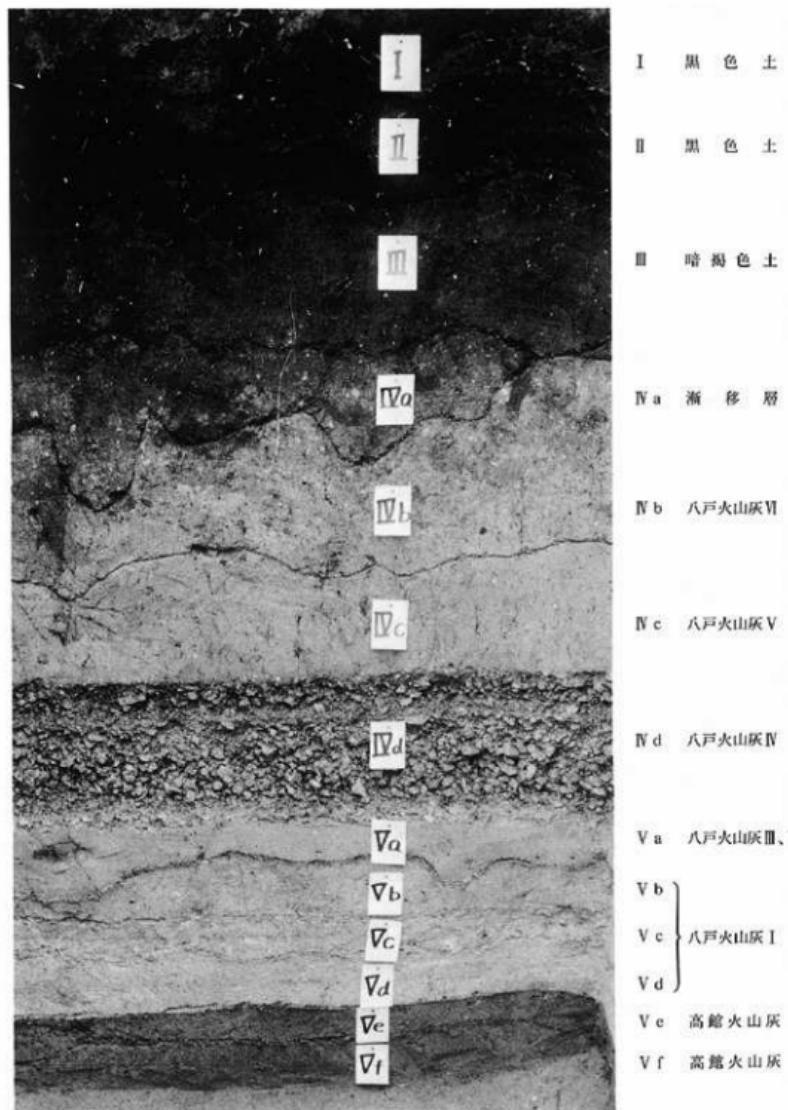


写真2 A地区基本層序(E-100ライン)



1



2

写真3 遺跡の全景(1—A地区を眺む 2—B地区トレンチ)



1



2

写真4 遺跡の全景(1—第1号竪穴住居跡(南から) 2—第4号竪穴住居跡(北から))

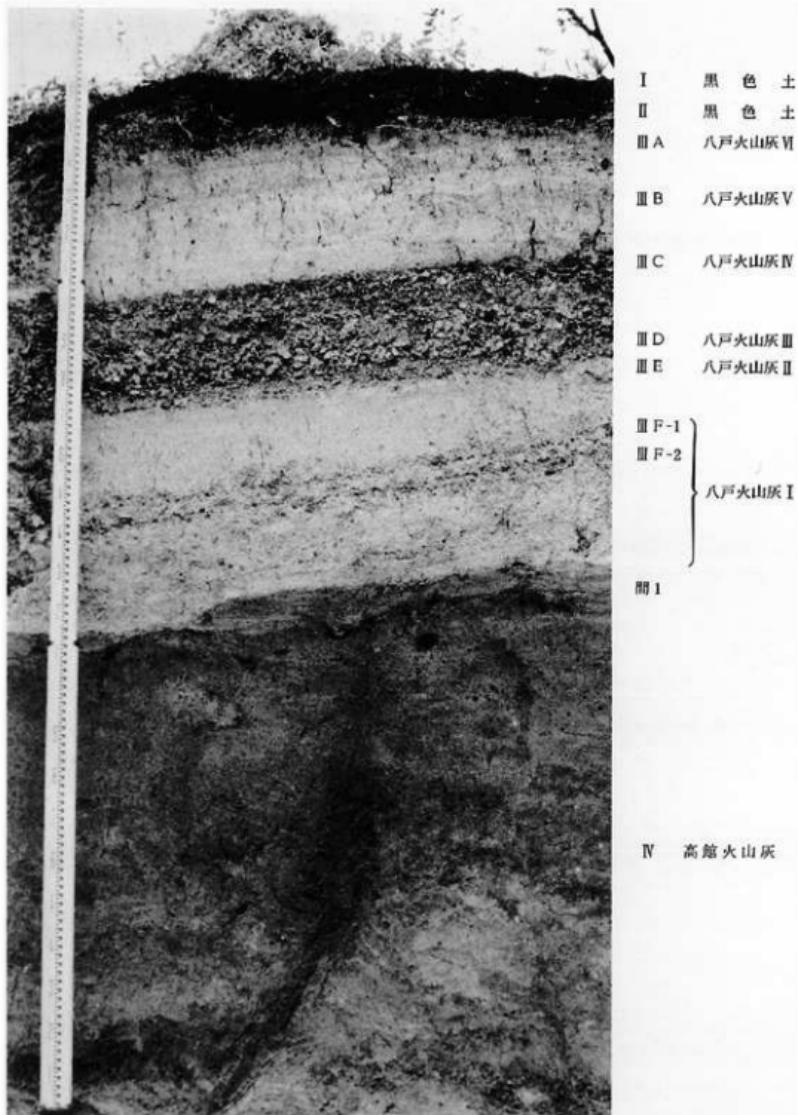


写真 5 B 地区基本層序

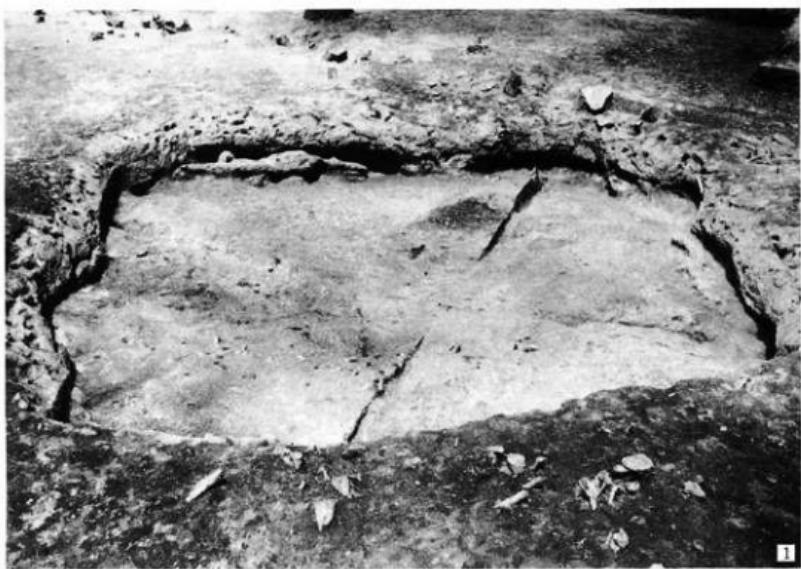


1



2

写真6 第1号竪穴住居跡 1(1—表土剥ぎ 2—セクション)



1



2

写真7 第1号竪穴住居跡 2(1—完掘 2—竪穴床面の掘り方)

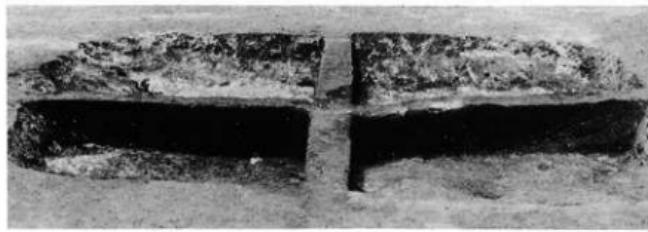
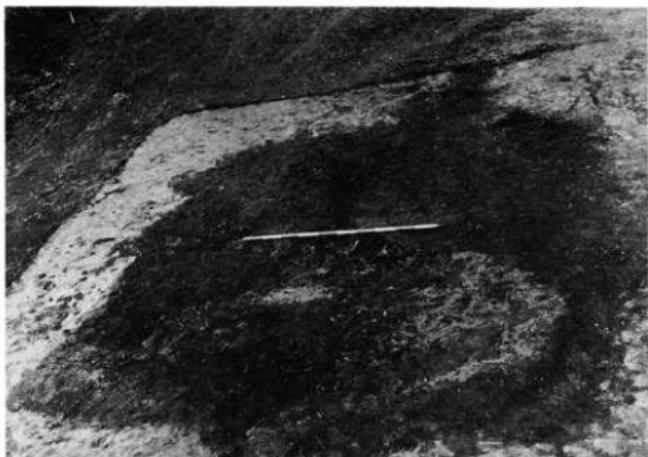


写真 8 第2号竪穴住居跡 1—プラン確認状況 2—完掘 3—南北セクション)

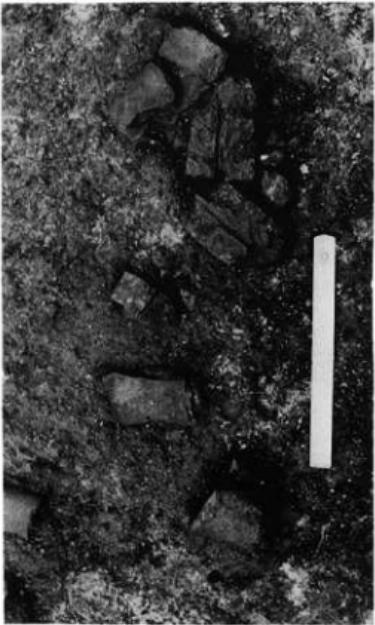


写真9 第2号竪穴住居跡3(1—かまど長軸断面 2・3—遺物出土状況)



1



2

写真10 第3号竪穴住居跡 1(1—地表面のくぼみ 2—完掘)



1

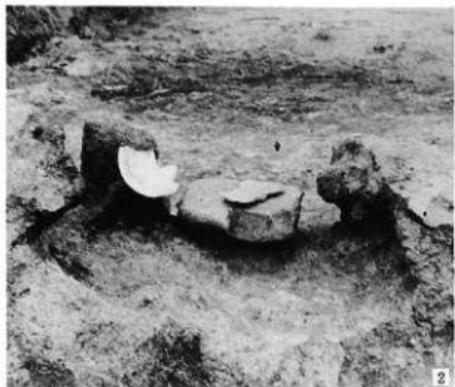


2

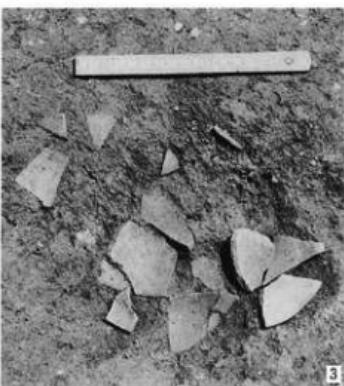
写真11 第3号竪穴住居跡2(1—遺物出土状況 2—竪穴内土壙)



1



2



3



4

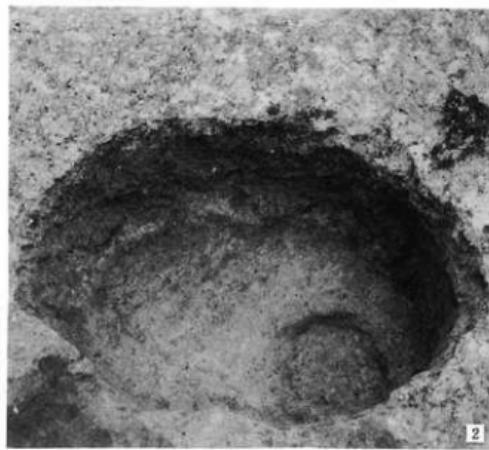


5

写真12 第3号竪穴住居跡 3(1—セクション 2—かまと  
3—土師器壊出土状況 4—紡錘車 5—刀子)



1



2



3

写真13 第3号竪穴住居跡4 (1—Pit 3 2—A土壤 3—B土壤)



1



2



3

写真14 第4号竪穴住居跡1(1—完掘 2・3—セクション)



写真15 第4号竪穴住居跡2(かまど検出状況)

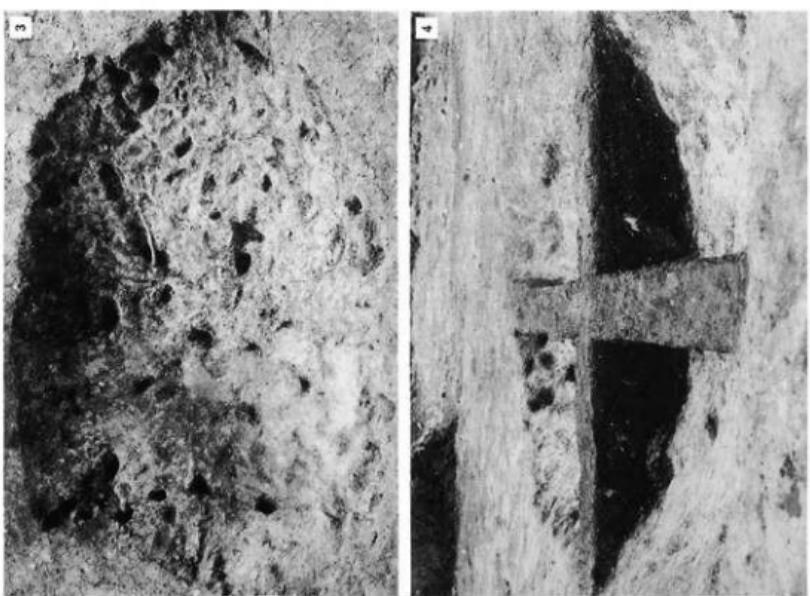
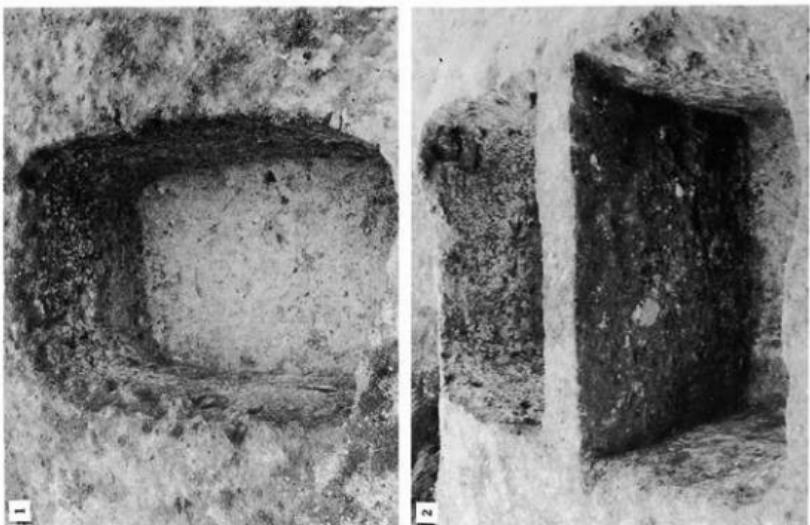
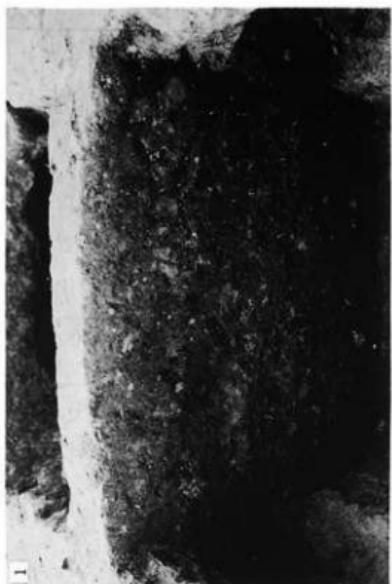


写真16 土壌(1・2—1号土壤 3・4—2号土壤)



1



2



3



4

写真17 土壌・溝状ピット (1・2—第4号土壤 4—第5号土壤 3—1号溝状ピット)



写真18 出土遺物(1～3第1号住居出土 4～9第2号住居出土)

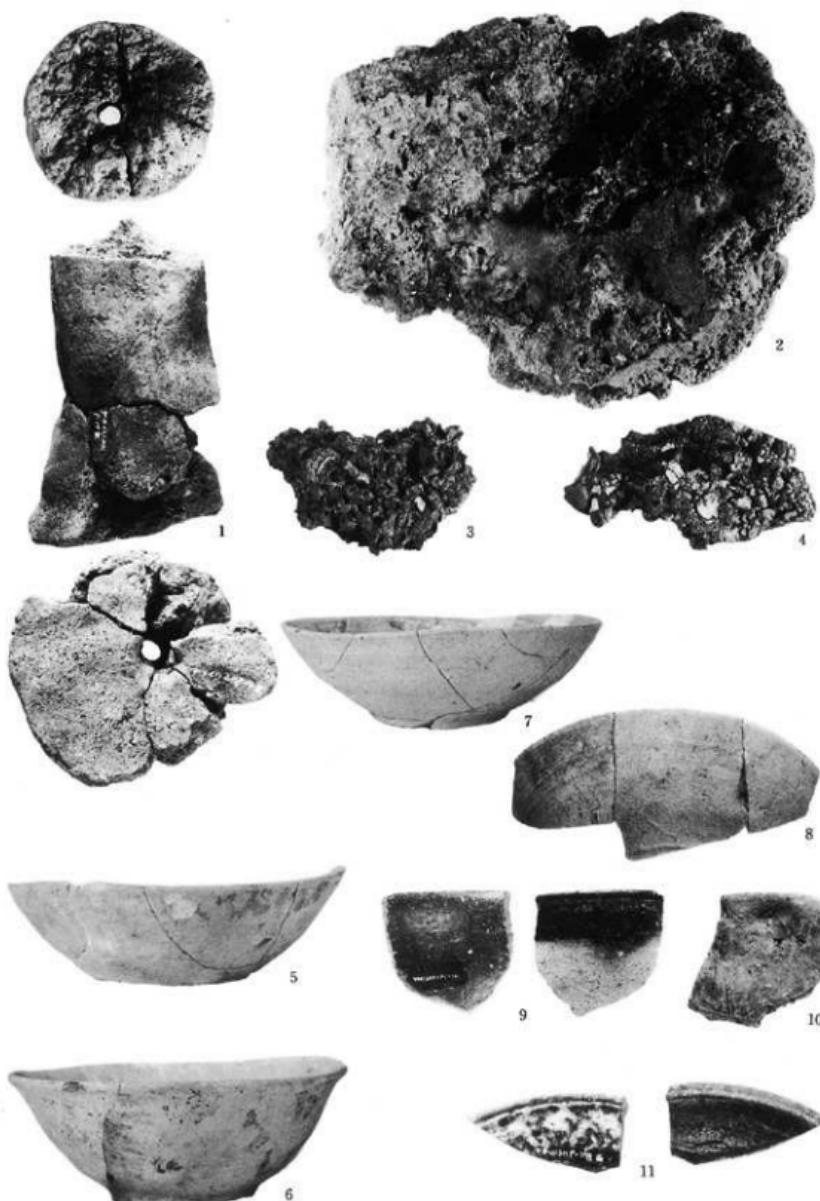


写真19 出土遺物(1~4第2号住居出土 5~11第3号住居出土)

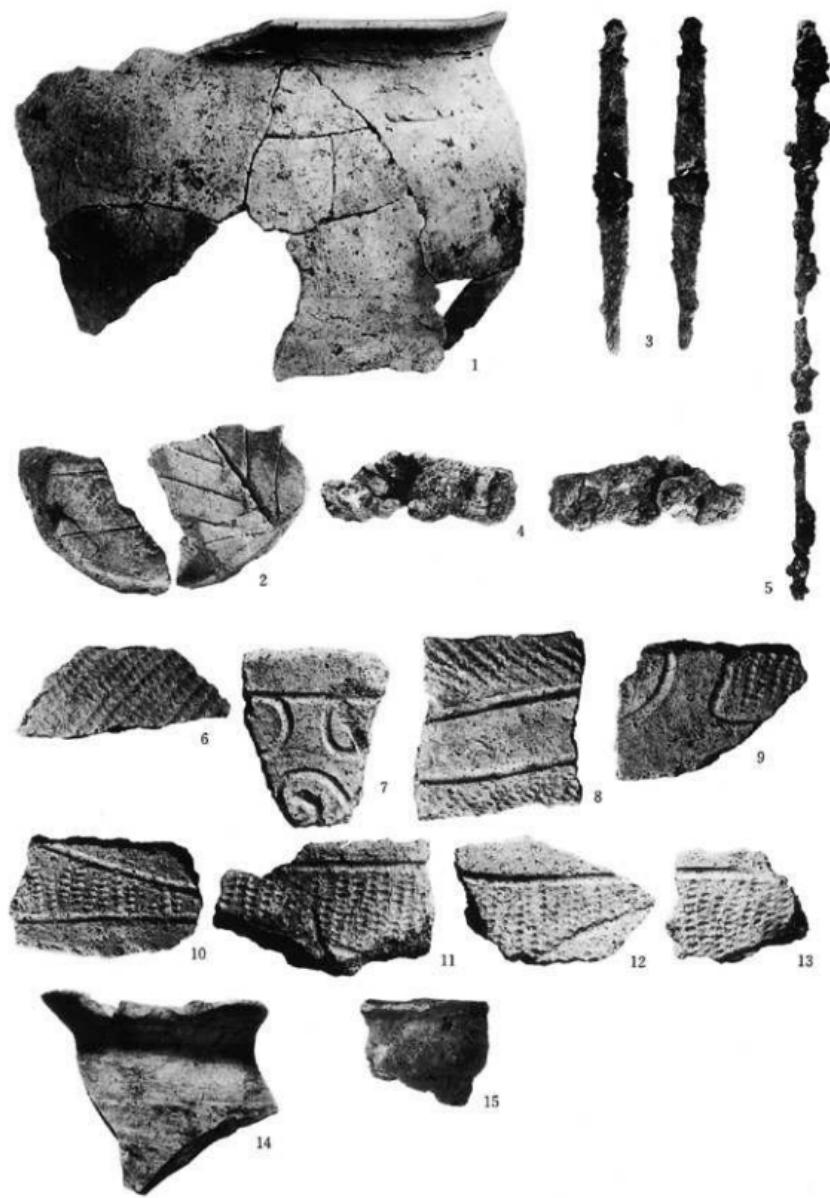


写真20 出土遺物(1～5第3号住居出土 6～15遺構外出土)

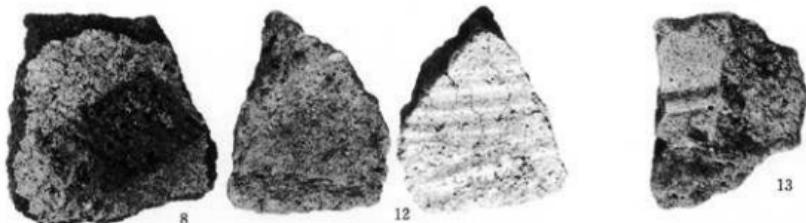
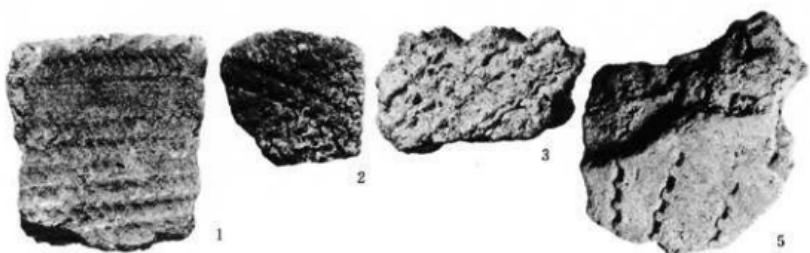


写真21 遺構外出土遺物(早期)

青森県埋蔵文化財調査報告書第109集

## 下谷地(1)遺跡

—東部上北広域農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年月日 昭和63年3月31日

発 行 青 森 県 教 育 委 員 会

編 集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒030-02 青森市新城字天田内

152-15

印 刷 所 東 奥 印 刷 株 式 会 社

〒030 青森市古川二丁目17番5号

T E L 76-5361